

MACHI GENKI PROJECT 2008-2021/2022

KANI PUBLIC ARTS CENTER *ala*

alaまち元気プロジェクトレポート 2008-2021/2022



KANI PUBLIC ARTS CENTER *ala* MACHI GENKI PROJECT 2008-2021/2022

alaまち元気プロジェクトレポート 2008-2021/2022



アーラが発信するコミュニティデザインのかたち
「alaまち元気プロジェクト」。

地域と連携しながら、
「生きる活力」と「コミュニティ」を創出し、
社会の健全化を目指しています。

はじめに

「alaまち元気プロジェクト」のこれまでとこれから

籠橋 義朗 可児市文化創造センターala館長



2008年から取り組んでいる「alaまち元気プロジェクト」が、活動15年目を迎えました。今回のレポートは中間報告として、これまでの活動実績のまとめと今後を展望する機会となるよう編集しています。

2017年の文化芸術基本法の改定により、それまでの文化芸術分野に限定されていた文化施設の任務に加えて、教育、福祉、まちづくり、観光など、劇場・音楽堂等にはその一端を担う任務があると規定されました。それまでは主に実演者側のための基本法であったものが、文化芸術を享受する国民のための基本法となったと理解しています。

我々が幸せに生活していくうえで、様々な「豊かなつながり」を持つことは大切です。そのつながりは、文化芸術であったり、スポーツ、趣味、娯楽だったりと人それぞれだと思います。市民がそういった「豊かさ」にアクセスし、「つながり」を持つことで、心の充足を感じることができるのが「住みよいまち」であると思います。私たちはそれを「元気なまち」と規定しています。

アーラは「えがおの劇場」をスローガンに掲げています。私たちの任務は、地域の人々に寄り添い、生きる課題に向き合いながら共に考え、文化芸術が持つ力を活用して、貢献していくことだと考えています。私たちはその活動を総称して「まち元気」としています。劇場が、人と人がつながるプラットフォームとしての役割を果たしながら、「えがお」でつながる取り組みを今後も途切れることなく、継続的に活動していくことが大切であると思っています。

最後に、「alaまち元気プロジェクト」は決してアーラだけで達成できる活動ではなく、この活動を支持・協力してくださる、たくさんの方々の存在があってこそ成り立っています。皆様にはこの紙面をお借りして心より感謝申し上げます。



CONTENTS

02	はじめに 「alaまち元気プロジェクト」のこれまでとこれから 笠橋義朗 (可児市文化創造センター ala 館長)	41	歌舞伎とおしゃべりの会
06	What's "alaまち元気プロジェクト"?	42	劇場フロントスタッフ養成講座
14	alaまち元気プロジェクト 年表	43	アーラ映画祭2022
16	特別寄稿 市民の生活の中に「アーラ」を位置づける—まち元気事始め。 衛 紀生 (可児市文化創造センター ala シニアアドバイザー兼まち元気そうだん室長)	43	アーラ紙芝居一座
18	人とヒトの繋がりが未来に続く 黒田百合 (劇・あそび・表現活動 Ten seeds代表)	44	平田オリザの「対話を考える」モデル授業
20	まち元気!短歌集 新井英夫 (体奏家、ダンスアーティスト)	44	まちが元気になる処方箋
23	2022年度 活動報告	45	ちびっこ鑑賞体験事業「ぐうちょっぱつ劇場!」
24	ala Collectionシリーズvol.13「百日紅、午後四時」	45	JAPAN LIVE YELL project in CHUBU 劇団うりんこ ベイビーシアター「MARIMO」
28	新日本フィルハーモニー交響楽団 地域拠点契約について、オープン・シアター・コンサート、音楽アウトリーチ	46	多文化共生プロジェクト2022「BORDER」
30	文学座 地域拠点契約について、文学座とつくるファミリー舞台「猫の事務所」 文学座俳優のキッズワークショップ	48	スマイリングワークショップ
32	おでかけ落語会	50	みんなのディスコ2022
33	みんなが演奏者! 一五一会ライブ!	51	エイブル・アート展 -アートの奥行き-
34	大型市民ミュージカル「君といた夏～スタンドバイミー可児～」	52	ココロとカラダの健康ひろば
38	児童・生徒のためのココロとカラダワークショップ	53	親子de仲間づくりワークショップ
40	アーラ未来の演奏家プロジェクト	54	就学前教育のための非認知能力ワークショップ「わくどきぐんぐん」
41	森山威男ドラム道場	55	みんなのピアノプロジェクト
		56	私のあしながおじさんプロジェクト
		58	劇場に関わる人のためのアーツマーケティング・ゼミ「あーとま塾2022」
		59	世界劇場会議国際フォーラム Final in 可児
		60	アーラまち元気部
		62	東日本大震災復興支援 祈りのコンサート2023
		63	2022年度 連携・協賛 団体/施設/企業/個人一覧
		64	コラム イギリスの劇場に憧れて 澤村 潤 (可児市文化創造センター ala 演劇プロデューサー)
		70	その先にある「ものがたり」

1

ミッショ

「芸術の殿堂」ではなく、 人々の思い出の詰まった「人間の家」へ

人にはみんな「違い」があります。価値観、習慣、容姿…誰一人同じという人はいません。その「違い」が、時として格差や差別、偏見となり、争いや孤立を生み出しています。近年の社会変化ではコロナ禍によって更なる分断と孤立化が急速に加速しました。また世界では多くの命が奪われる悲惨な戦争の歴史が繰り返されています。争いや分断、孤立の絶えない社会だからこそ、私達は文化芸術が必要なのだと信じます。なぜなら文化芸術は「違い」から派生したあらゆる差別や偏見を昇華し、「豊かさ」となってその

魅力を放つ力があるからです。劇場の存在意義はまさにこの点にあります。劇場は多様な価値観と出会う場であり、人と人とがつながる場でもあります。芸術による感動が希望を生み、つながりが豊かさを生成します。この「豊かさ」「希望」そして活力を生み出す「つながり」を社会に醸成していくことこそが、私達の存在意義であり、それによって「全ての人々が違いを価値として受容し、ありのままの自分で幸福に共生できる社会」を築いていくことを目指しています。



**WE ARE ABOUT
PEOPLE
NOT ART**



現在の社会状況

地縁

地域コミュニティの弱体化

人口減少、過疎化、町内会減少、こども会縮小、担い手不足 など

血縁

家族内の課題増加

シングルマザー、引きこもり、介護、ネグレクト、DV など

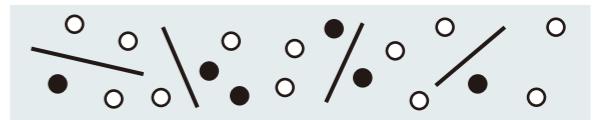
社縁

働き方の変化

所得格差、非正規雇用、働き方改革、男女共同、終身雇用制度の廃止 など

現在の社会イメージ

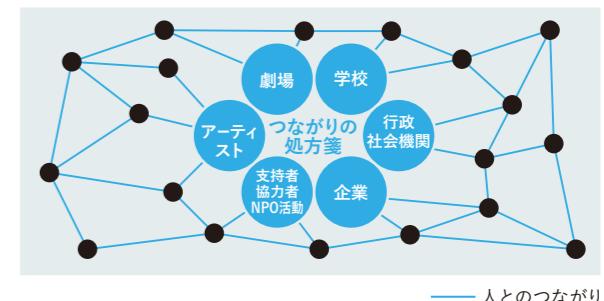
現在の社会は、従来からの地縁・血縁・社縁が弱体化したことで、人々は「生きづらさ」を感じ、孤立化する傾向にあります。社会全体から「生きる活力」が失われつつある状況です。



●活力のある人 ○活力の無い人 —阻害要因

文化芸術で生きる活力とつながりを創出

劇場は地域社会の「新しい広場」としての役割と併せ、文化芸術を生かした「つながりの処方箋」によって誰も取りこぼさない「セーフティネット」としての役割を果たす必要があります。これは、アーティスト・行政・学校・企業・市民など様々なステークホルダーとの連携によって実現・発展を目指すものです。



健全化した社会イメージ

2

ビジョン

全ての人々が
“違い”を価値として受容し、
自分らしく
幸福に共生できる
社会の実現



第1の矢 クリエイティブ アプローチ

多様性と共創性を育み、感動と生きる希望を
生み出す舞台芸術の創造発信

- ・地域から全国へ～サポーターと共に創る質の高い舞台芸術
- ・国内トップクラスの芸術団体との地域拠点契約
- ・英国劇場とのユース世代国際交流プロジェクト
- ・幅広い世代に向けた鑑賞機会の提供
- ・市民に寄り添うマーケティングの実施提供
- ・鑑賞モニターとの意見交換や鑑賞コミュニティの構築



第2の矢 コミュニティ アプローチ

人と人がつながり、互いに
エンパワメントされる豊かな地域社会の実現

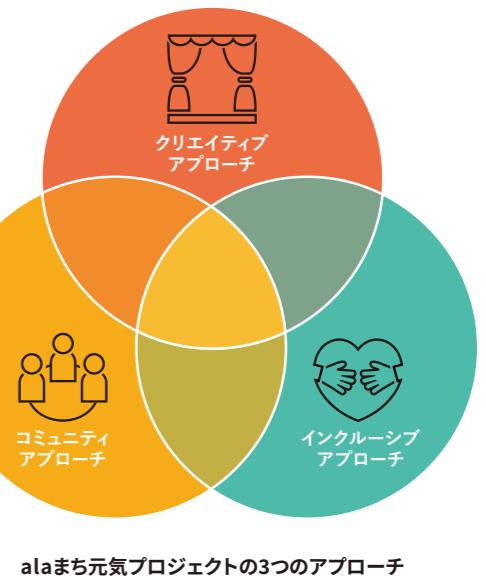
- ・市民活動の発表の場の提供
- ・市民参加型公演の実施
- ・市民向け各種講座／アウトリーチ・プログラム
- ・学校向けアウトリーチおよび研修の実施
- ・劇場を知るための各種体験プログラム
- ・ユース世代の実演芸術の学びと挑戦の場の構築



第3の矢 インクルーシブ アプローチ

生き辛さや社会的孤立を緩和・予防する
文化芸術によるセーフティネット

- ・乳幼児を抱える親子向けプログラム
- ・健康寿命を伸ばす高齢者向けプログラム
- ・不登校や貧困対策としての子ども向けプログラム
- ・多文化共生を促進するためのプログラム
- ・障がい者との協働を促進するためのプログラム
- ・ジェンダーなど新しい社会課題への取り組み



alaまち元気プロジェクトの3つのアプローチ

3つのアプローチは
重なり合う部分もあって、
それぞれの効果を
高めているんだね。



3

ビジネスモデル

“社会包摶型劇場経営”

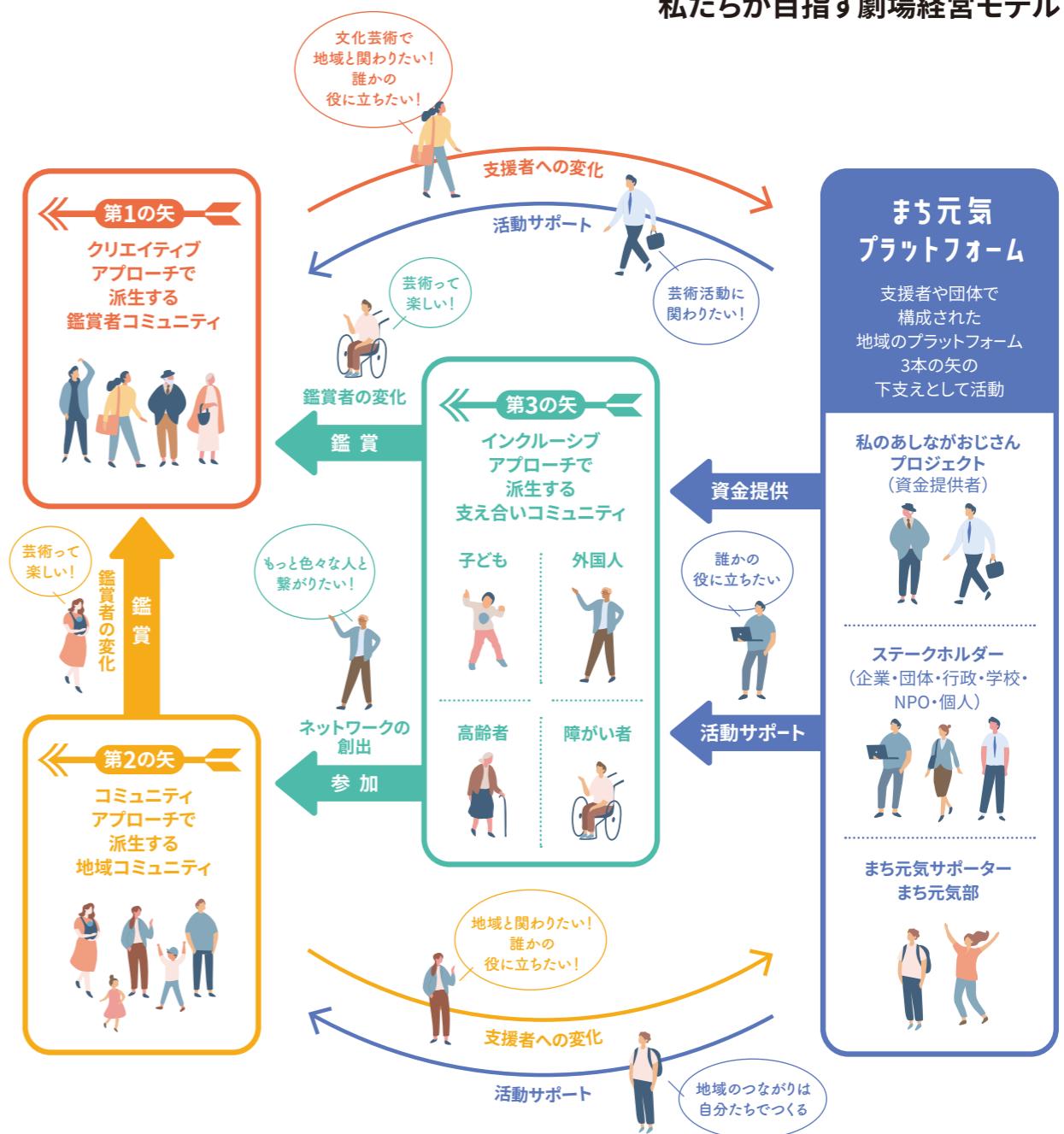
『3本の矢』によるアプローチを連動させることで、従来型の“消費性の強い鑑賞者や参加者”から“理念に共感する支持者や支援者”へと人々の変化を促し、「生きる活力」と「つながり」を社会に醸成していきます。共感の輪を広げることで、それは劇場の持続的な鑑賞者開発へと繋がっていきます。その結果、地域内の人と活動と資金の好循環を生み出します。

経営効果

- 事業収益の増加
- 資金調達環境の向上
- 社会的コストおよび受益者負担の軽減



“集客”ではなく“創客”。
つまり地域劇場では、
大都市のようにチケットを
「売る(selling)」のではなく、
「売れる環境や関係性を
「つくる(marketing)」という
妄想なんだね。



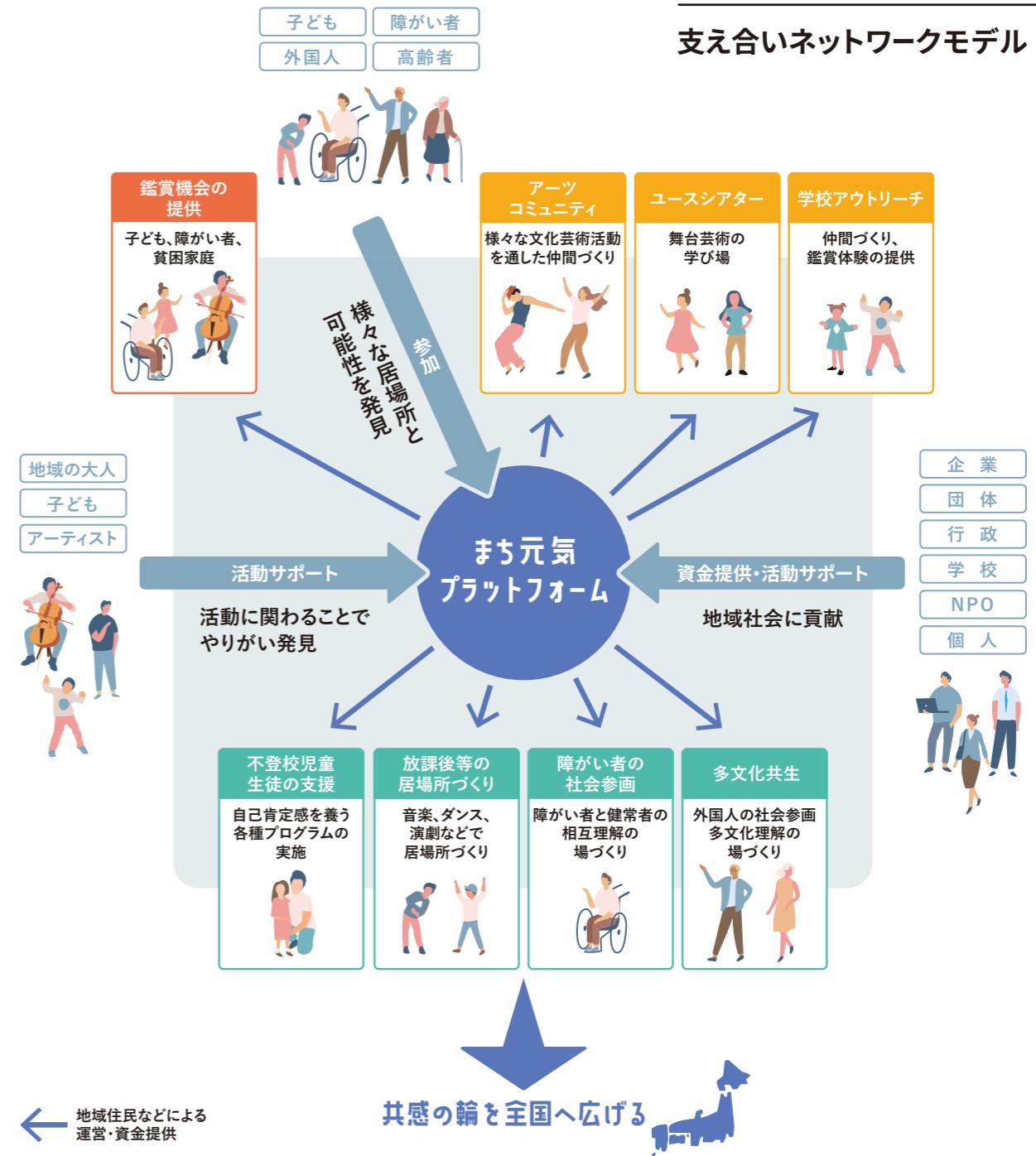
4

中長期プラン

支え合いのネットワーク構築

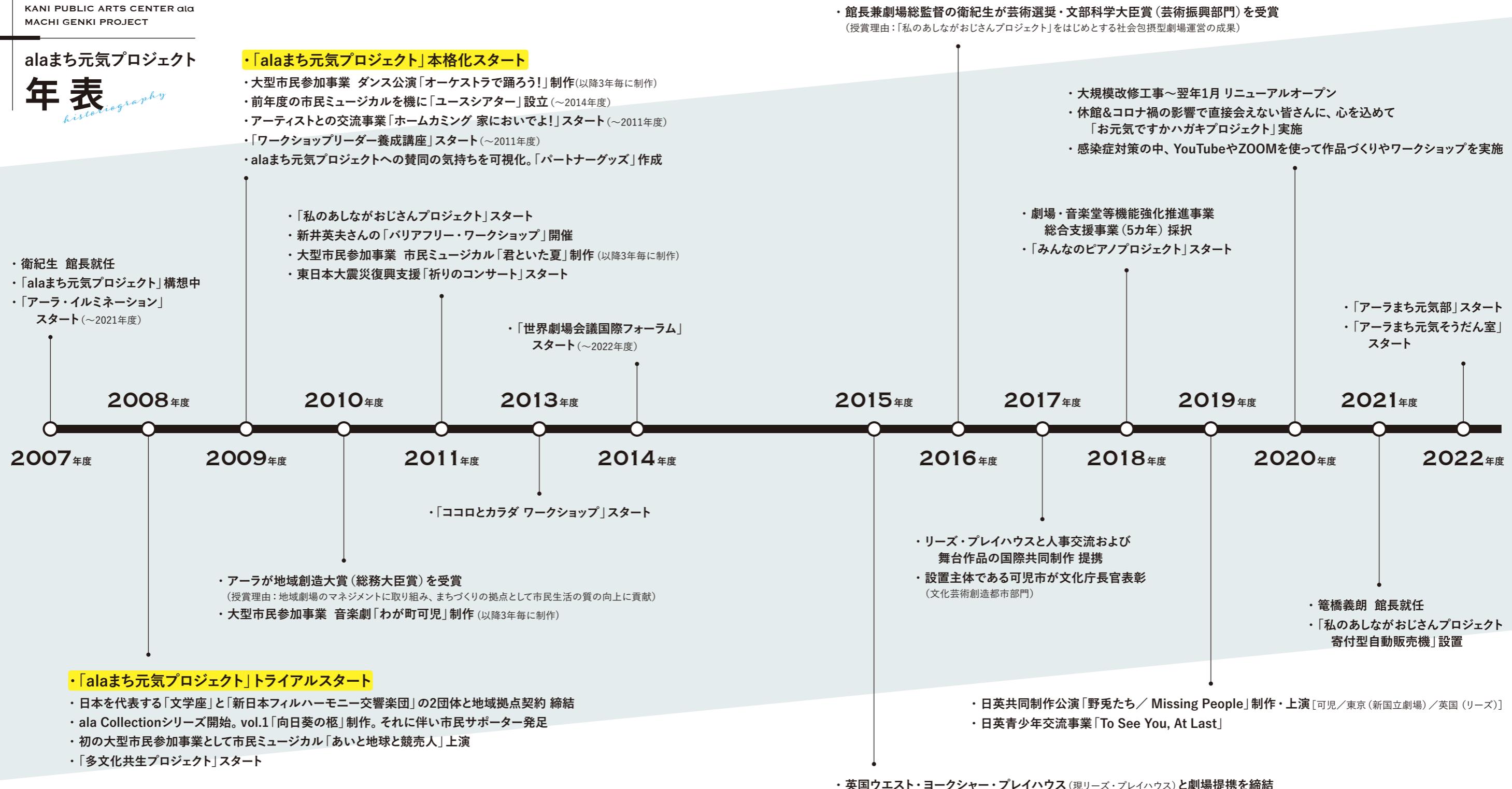
「えがお」でつながる持続可能な 支え合いのネットワーク構築を目指して

アーラはミッションの実現に向けて、「持続可能な地域の支え合いのネットワーク（まち元気プラットフォーム）」の構築を今後の最重要課題として取り組んでいきます。なぜならアーラの活動の支持者や協力者、行政、学校、福祉施設、企業などが中心となって、人々の「えがお」をつなげていく「まち元気プラットフォーム」がビジョンで示す3つのアプローチの運営と資金調達の下支えとなり、地域の網の目となって人々の活力とつながりを生み出していくからです。このネットワーク構築こそが、持続可能な公共劇場経営の戦略的なツールそのものであり、今後、このノウハウを全国の劇場・音楽堂等に発信していくことで、劇場を拠点とした「誰ひとり取りこぼさない文化芸術による支え合いのネットワーク」を全国規模で構築していくことを目指します。



alaまち元気プロジェクト

年表
historiography



市民の生活の中に 「アーラ」を位置付ける - まち元気事始め。

衛 紀生

可児市文化創造センターalaシニアアドバイザー兼
アーラまち元気そだん室長



「alaまち元気プロジェクト」を始める引き金になったのは、98年に初めて訪れた英国北部のリーズ市のウエスト・ヨークシャー・プレイハウス(WYP※現リーズ・プレイハウス)での劇場とまちの人々との「つながり方」に考えられないほどの衝撃を受けたからでした。当時は、のちに慶應大学名誉教授になる井関利明先生に私淑して、関係づくり(リレーションシップ)マーケティングに夢中になっていて、その人間と人間の「つながりの誘客効果」の尋常ではない強さに、これをマーケティングで何とか活かせないかと思っていた。

当時の英国劇場界は、サッチャー政権で生じた格差拡大により、かつて優良顧客の多くを占めていた中間層のアンダークラス化が起きて、劇場ホールを来訪する顧客は著しく落ち込んでいました。その顧客をもう一度取り戻そうと、英国芸術評議会は大規模な予算を費やして「鑑賞者開発」のキャンペーンを実施していました。WYPも「Big Deal」という大きなバジェットの広報宣伝費で多くの市民に劇場に足を運んでもらおうとしていました。90年に新劇場を創設して以来、WYPは、コミュニティ・アプローチの質、量とも英国随一とされて「英国北部の国立劇場」と称されるほどのブランドを誇っていました。年間1,000のプログラムに20万人の市民がアクセスしていて、私は巨額の宣伝費よりも、この20万の人々との「つながり」を活かしてマーケティングを展開する方が鑑賞者の誘引効果があるのではないか、という経営提案をマーケティング部長にしました。情報(インフォメーション)より、交流と共感(コミュニケーション)の方が誘客効果は強いというのが合意となりました。それほど、コミュニティ・プログラムの参加者と劇場職員との関係はフレンドリーで、信頼関係で結ばれていました。

また、あわせて市民たちの表情から、この劇場によって市民たちにシビックプライドが生成されていることが

窺えたのです。これが、出来るだけ大きな蜘蛛の巣を張って獲物(観客)を捕えるWaiting Mode(蜘蛛の巣型)ではなく、劇場の外に飛んで行って受粉して其処に実りをもたらし、代わりに蜜をもらうSeeking Mode(蜜蜂型)の方が、劇場経営では、より合理的であると確信しました。これをマーケティングの巨人セオドア・レビットの歴史的論文『マーケティング近視眼』の知見である「事業定義」に倣えば、「芸術の殿堂」から「人間の家」とアーラを定義して、市民の精神的・心理的シェルターに向かうことで共感者や支持者たちの「つながりの輪」である「新しいマーケット」を可児に創ることを視野に入れた試みでした。WYPの「鑑賞者開発キャンペーン」での成果も、報告書では英国内での最上位にランクされました。これに私は、以前のマーケットとは別のフェイズの、質の違う「新しいマーケット」がリーズ市に生まれつつあると確信しました。

「可児」と言ってもほとんど誰も何処にあるのか、「カニ」とも呼んでもらえない人口10万の町に劇場の成立するマーケットはあるのか、と赴任当初いさか心許ない気分がありました。ただ、良質な舞台を継続してやり続けて、滞在型のカンパニーの俳優スタッフと市民との「関係づくり」を進めて、しかも宣伝費は節約して、その分を市民との交流の機会に費やす選択をすれば、アーラの存在意義に共感する支持者による「新しいマーケット」を創出できるのではと、リーズでの体験から構想しました。つまり、普通の人々の、普通の生活の中にアーラを位置づけようと始めたのが「alaまち元気プロジェクト」でした。初年度24事業267回(2009年実績)からの出発で、短期の収支改善とともに費用対効果を近視眼的に陥らず中長期的な経営視点で「まち元気」に愚直に傾注することによって、「社会包摂型劇場経営」のマーケット形成は実証されたのです。



アーラに初めて伺ったのは2008年でした。「ここは芸術の殿堂ではなく人間の家である」その信念のもと、私は石川県から通い、様々なワークショップや、市民ミュージカルの演出をさせて頂きました。2011年度の市民ミュージカル「君といた夏」は映画「スタンド・バイ・ミー」をモチーフに、文学座・瀬戸口郁氏の脚本、上田亨氏の作曲で、初演を迎えました。少年たちのひと夏の物語の中には「命」「仲間」「家族」がちりばめられています。90人以上の大人数の出演者を抱えるこの作品は3度の再演を含め、可児になくてはならない市民参加の演目になりました。こうして15年可児に通うと、様々な化学反応を目の当たりにします。初演(2011年度)の出演時にお腹にいた子どもが、

2022年度にはお母さんと共に出演を果たし、2013年に3才児のワークショップで出会った子どもが、2022年度のミュージカルで主役を務めました。作品の求心力もそうですが、アーラの存在も大きいと思います。すべての市民参加作品の出演者は延べ1,000人以上になり、彼らにとってここは第二の故郷になっています。人と人が繋がり続け、文字通りの「人間の家」になっているのです。表現することは、優れたアート作品を創ることや、アーティストになることだけが目的ではありません。大切なのは自分の心の声を他者に届けることです。生きづらさを抱えた現代だからこそ、生まれてくる想いの強さや深さ、そして互いを信頼し、支えあう

ことから、たくさんのこと学んでいきます。芝居は初めてという子どもや、大人たちが「その気」になつたらプロでもかないません。彼らに演技は必要なく、作品を感じ読み取って共有していく。点はやがて線になり、心が動き始め、やがて舞台で生き生きと輝きだすのです。そして嬉しいことに、思いもかけないような台詞が飛び出す、そんな瞬間に何度も立ち会うことが出来ました。一人ひとりの多様性を受け入れ、尊重すること。それが当たり前になれば、すべてのひとにとって生きやすい社会になるのでは…と、思います。これからの中も達が、可児市民の皆さまの生きる未来が、今よりも少しでも幸せな世界であってほしいと願っています。

劇・あそび・表現活動 Ten seeds代表
市民ミュージカル「君といた夏」演出

黒田百合

人とヒトの繋がりが未来に続く

特別寄稿

まち元気！短歌集

新井英夫

体奏家、ダンスアーティスト

「alaまち元気プロジェクト」には2011年から現在まで新井チーム（板坂記代子・ポン松岡さんら）の座長として、Ten seedsチーム（黒田百合さんら）と共同講師で関わらせてもらっています。10年以上担当してきた複数のワークショップで、アーラならではの心に残る光景やエピソードを短歌に託して綴ってみたいと思います。

親子de仲間づくりワークショップ

泣いて笑ってあそび食べ、
数年後にもまた会おうね！

家ではできないようなあそびを通して子どもも親御さん同士もまるっとお仲間に。寝ていても泣いててもOK。あそびの後は楽しくおやつ&お弁当タイム。数年後に「下の子が生まれたのでまた来ました～」なんて嬉しい再会も今までたくさんありました。ここに赤ちゃんのとき親子で参加していた男の子が2022年度の市民ミュージカル「君がいた夏」の主役に大活躍されたとのこと。オドロキよろこび！

ココロとカラダの健康ひろば

本名は知らないけれどお友だち、
いつの間にやらみなアーティスト！？

高齢者の仲間づくり、ここでは「〇〇ちゃん！」とワークショップネームで呼び合うフラットな関係が基本、長年のお付き合いでも本名は知らない(笑)なんてことも。うまい下手はどうでもいい！面白い楽しいが一番、演劇や身体表現のグループ即興を楽しんでいます。でも人生経験が生かされた発想力と表現力に講師チームは舌を巻きっぱなし。活動後のお茶飲みトークタイムでは毎回深くてイイ話に花が咲いてます。

児童・生徒のためのコミュニケーションワークショップ

達いから育つやさしさ豊かさよ、
子どもたちから教わったこと

表現体験を通して多様なコミュニケーションのあり方を体験してもらう学校でのワークショップ。可児市の特徴は多文化共生、母国語が日本語以外の子ども達が教室で

共に学んでいることが普通の光景です。授業と少し勝手の違うワークショップ、まだ日本語が思うように喋れない子のために、日本語→英語→タガログ語とそれぞれ得意な言語で子ども達がリレーで通訳してくれてワークショップが成立したがありました。違いを当たり前に受け容れ自然に手を差し伸べあう子ども達の姿に未来の希望を感じました(オトナ達も学ぶべしですね)。

スマイリングワークショップ

ギター三線うた踊り、
アーラステージライブだぜ♪

不登校の児童・生徒を支援する教室スマイリングルームでの表現ワークショップ。2022年度は小学低学年から中学3年生まで男女幅広くの参加がありました。参加のあり方は原則希望制で自由、子ども達の特性や興味に寄り添ってダンス・造形・音楽など講師側が活動内容を組んでいきます。そんな中でオキナワにルーツと興味を持つ中3男子から「アーラでBEGINを観たんだ、三線を弾いてみんなと歌いたい！」とリクエストが。月一回の

ワークショップでちょっとずつ持ち歌も増えての最終回、新井チームの音楽担当はっしーのピアノと篠橋館長の飛び入りギター、そして小中学生混合のうたとダンスチームが合体してアーラ主劇場(BEGINと同じステージ)で「ライブ」を実施しました！オトナも子どももマゼコゼ(チャンブルー)になって、アーラならではの大団円♪

最後に新井英夫から

みんなからギフトをもらっているのはね、
実はわたしの方なんですよ

10年以上の関わりの中で、私は文化芸術に関わるアーティストとして、またひとりの人間として大きく成長させてもらいました。赤ちゃんから高齢者まで、たとえ生きづらさを抱えていたとしても、人がいきいき生きるために必要なことは何か？その答えがアーラでの活動の中にありました。私は昨年から進行性の病気のため現在車椅子で活動を続けていますが、アーラで出会ったたくさんの「まち元気」に今も背中を押されています。ありがとうございます！





ala Collectionシリーズvol.13 『百日紅、午後四時』

アーティスト・イン・レジデンスを基軸として、第一線で活躍する俳優・スタッフが可児市に滞在しながら作品を制作し、可児から全国に発信する質の高い作品づくりを目指しています。



クリエイティブ・アプローチ

可児市から東京、
そして全国へ！

2008年から始まったala Collectionシリーズ。東京一極集中といわれる演劇界において、ここ可児市で質の高い演劇作品を創作し、全国に届けるという、これまでの定説(東京→地方)の逆を行くプロジェクトです。この挑戦的なプロジェクトの背景には私たちが理想とする、英国を代表する地域劇場リーズ・プレイハウス(LP)の存在があります。英国では、クリエイティブな舞台作品を生み出すことが劇場のスタンダードであり、LPでは、創造活動が基軸となって、子どもから高齢者、移民、障がい者など、あらゆる人々の創造性を刺激しながら、創造活動とリンクして人々に寄り添う様々なコミュニティ活動を展開

しています。公演を楽しみにやってくる人々や、ワークショップに参加に来る子どもや高齢者たちなど、日常的に多くの人々で賑わうLPの風景は、催物がある時だけ賑わう日本の公共劇場とは大きく異なり、市民から劇場が愛されていることを物語っています。そんな風景をアーラでも実現させたい。そして全国にその賑わいを届けたい。そんな思いが本シリーズの根底にあります。

可児市でのアーティスト・イン・レジデンスによって創作する本シリーズは、自然に囲まれた静かな環境はもちろん、公募で集まった市民サポーターから毎日のように届く真心の込もった差し入れや手料理など、

稽古	8/24～9/21(計24日)
公演	可児公演：9/26～10/2(6回) 東京公演：10/20～27(7回) 地方公演：5回(大府、豊田、長岡、能登2回)
会場	ala小劇場、吉祥寺シアターほか
集客数	可児：1,240人 東京：961人
参加者数	出演者：8人 市民サポーター：13人
作・演出	鈴木聰
協力団体	NPO法人alaクルーズ

市民の温かさに包まれたアーラ自慢の稽古場がキャストやスタッフを出迎えます。さらに日々の生活の中で知り合う市民とのふれあいなど、座組の皆さんにとっては、不慣れな環境でもそれを補うほどの豊かさが可児市には溢れています。一方で、市民にとっても第一線で活躍するキャストやスタッフとの交流やクリエイティブな現場に立ち会える環境は、普段の生活では味わえない貴重な体験の場にもなっています。この双方の相乗効果が様々な場面で刺激され、東京にはない特別な創作環境を生み出しているのです。これまで本当に多くのキャストやスタッフが可児市での創作を体験しながら、まさに一丸となって作品作りに取り組んできました。このように豊かな時間を共有しながら可児市で生まれた作品群は東京でも

話題となり、数々の演劇賞を受賞するに至っています。そして、13演目という本シリーズに携わっていただいた全ての座組の皆さんや市民の皆さんとのつながりは、私たちアーラにとってかけがえのない財産となっています。

アーラ20周年となる2022年は、初めて新作書き下ろしに挑戦しました。新作の利点のひとつには、その時々の風潮を作品の中に反映させることで、より共感性の高い作品を生み出せることにあります。今回は「人生百年時代をどう生きるか」という今の風潮を盛り込んだ家族劇。作・演出の鈴木聰さんは「コロナや戦争で世の中は大変だけど、劇場には笑いと優しさが溢れる豊かな時間を作りたい」と云い、その言葉通り、この物語では市毛良枝さん演じる66才の一美がボーイフレンドを紹介するところから始まります。弟妹夫婦や息子、謎めいた若い女性、それぞれ苦労や悩みを抱えつつ、誤解や嫉妬のゴタゴタがありながら、家族の優しさや温かさをじんわりと伝えてくれます。市毛さんは「久しぶりに舞台に立つなら、ここ可児だなと思っていました。じっくりと時間をかけた芝居作りが出来て、本当にうれしかったです」と云います。また作品を観たお客様からは「全身に沁みる芝居。本当に見て良かった」「私のこれからをそっと明るくしてくれるお芝居です」など、作品から発せられる温もりがそのまま伝播したかのような多くの温かいコメントが寄せられました。このように人々の温もりの連鎖が今の時代にこそ必要なのだと感じます。そして、この温もりの連鎖を多くの方々につなげていくことが私たち劇場の使命なのだと思います。

これまで本シリーズに携わっていただいた全ての方々に感謝しつつ、今後も更なる劇場の賑わいと温もりの連鎖を求めて、アーラでの作品作りは続いていきます。



ala Collection シリーズ

作品一覧

Vol.1 『向日葵の柩』
作：柳美里、演出：金守珍
出演：山口馬木也、山田ひとみ、藤川一歩、
松山愛佳 ほか
2008年11月：可児
2009年9月：豊橋、広島、八尾、兵庫、可児、
東京



Vol.3 『精霊流し』
作：岡部耕大、演出：加納幸和
出演：馬渕晴子、芳本美代子
2010年7月：可児 8月：東京、大分、大阪



「佐藤様、40連泊ですね?!」とホテルの受付で宣告された時は
倒れるかと思いましたが、なじみのスナックが出来、土建会社の
社長とお友達に成り、温泉施設も心地よく、こんな快適な環境で
演劇稽古して良いのか?と悩む毎日でした。可児は第二の故郷です!!

ala Collectionシリーズvol.9 日本近代古典傑作選「お国と五平」「息子」主演

佐藤B作

Vol.2 『岸田國士小品選「紙風船」、
「葉桜」、「留守」』
作：岸田國士、演出：西川信廣
出演：音無美紀子、麻丘めぐみ、
若松康弘、村井麻友美
2010年1月：可児、東京 10月：長岡、
上越、草津、吹田、下呂



Vol.4 『エレジー～父の夢は舞う～』
作：清水邦夫、演出：西川信廣
出演：音無美紀子、麻丘めぐみ、
若松康弘、村井麻友美
2011年10月：可児、東京、富士、長岡、
滋賀、茅野、兵庫、上越 11月：富山、能登
本作で平幹二朗氏が第19回読売演劇大賞
優秀男優賞、文化庁芸術祭「芸術祭優秀賞」
ダブル受賞



Vol.5 『高き彼物』
作・演出：マキノノゾミ
出演：石丸謙二郎、田中美里、品川徹、金沢映子、
酒井高陽、細見大輔、藤村直樹
2012年6月：可児 7月：東京、滋賀、京都、長岡、
石川、広島、日田、福岡
関西・十三夜会賞を受賞



Vol.7 『黄昏にロマンス』
作：アレクセイ・アルブーゾフ
英訳：アリアドネ・ニコラエフ
翻訳：谷崎潤一郎
演出：佐藤B作、七瀬なつみ、石母田史朗、
佐藤銀平、山野史人
2016年9月：可児、長岡、黒部、射水、日田
10月：東京



マキノノゾミ

可児に滞在して芝居を作ることは、たいへん豊かな体験でした。自分の精神の安定にとっては特に。文字通り「第二の故郷」と思っています。

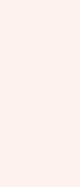
ala Collectionシリーズvol.5 「高き彼物」作・演出
ala Collectionシリーズvol.9 日本近代古典傑作選「お国と五平」「息子」演出

佐藤B作

可児での滞在制作の充実感は今も
鮮明に覚えております。地元の方達
との交流、明るく開けた劇場、可児の
空気や夕日。あの時間は濃密で、故郷のない
私にとっては思い入れの深い地となりました。

ala Collectionシリーズvol.10「坂の上の家」主演

亀田佳明



アーラは日常と非日常（＝演劇）がボーダレスにつながってる。
そこが好き。40日間通う中で、作品を創るのは私達だけではない
ことを学びました。地域の方々、市民サポーターのみなさんに支えら
れて初日の幕が開き、お客様の参加を得て物語は完結する。これからも良質な
作品を創り続けてください。ずっと応援しています。演者として、観客としても。

ala Collectionシリーズvol.11「移動」主演



Vol.9 『日本近代古典傑作選「お国と五平」「息子」』
作：谷崎潤一郎（お国と五平）、小山内薫（息子）
演出：マキノノゾミ

出演：佐藤B作、七瀬なつみ、石母田史朗、
佐藤銀平、山野史人
2016年9月：可児、長岡、黒部、射水、日田
10月：東京



Vol.11 『移動』
作：別役実、演出：西川信廣
演出：竹下景子、たかお鷹、嵐圭史、本山可久子 ほか
2018年10月：可児、宇都宮、長岡 11月：東京、四日市



地元の人とふれあい、自然に包まれ
る幸せをアーラで味わいました。芸
術が未来へ続く希望でありますように。

ala Collectionシリーズvol.13「百日紅、午後四時」主演



Vol.13 『百日紅、午後四時』
作・演出：鈴木聰 出演：市毛良枝、陰山泰、福本伸一、朝倉伸二、
岩橋道子、弘中麻紀、瓜生和成、平体まひろ
2022年9月：可児 10月：大府、豊田、長岡、東京、能登



Vol.8 『すべてこてこてこ』
作：吉永仁郎、演出：西川信廣
出演：坂部文昭、千葉哲也、
春風ひとみ、福本伸一 ほか
2015年9月：可児 10月：東京、徳島、
岩手、栃木、長岡
本作で坂部文昭氏が第23回
読売演劇大賞優秀男優賞を受賞



Vol.10 『坂の上の家』
作：松田正隆、演出：高橋正徳
出演：亀田佳明、鈴木陽文、石丸椎菜、大野香織、陰山泰
2017年10月：可児、長野、長岡、小野、筑後、舞鶴 11月：東京



ala Collectionは、豊かでシンプルな可児での生活の中で、座
組全員が創作に全神経を向けられる、素敵な企画です。だから
こそ良質な演劇作品を創り、お届けすることができる。どうかこれ
からも、豊かな創作現場から心に残る作品を、全国に届け続けてください！

ala Collectionシリーズvol.12「紙屋悦子の青春」主演
ala Collectionシリーズvol.13「百日紅、午後四時」出演

Vol.12 『紙屋悦子の青春』
作：松田正隆、演出：藤井ごう
出演：平体まひろ、長谷川敦央、藤原章寛、枝元萌、岸穂隆至
2021年9月：可児 10月：長岡、東京
本作で平体まひろ氏が文化庁芸術祭新人賞を受賞



新日本フィルハーモニー 交響楽団



小学校でのアウトリーチの様子（2019年度）

2008年度よりアーラは日本を代表するオーケストラの一つ「新日本フィルハーモニー交響楽団」と地域拠点契約を結んでいます。この契約では、アーラで定期的に公演を行うことはもちろん、ワークショップや学校・福祉施設などに出向いたアウトリーチ活動などを包括的に行う提携で、質の高い様々な活動を地域の皆様に展開しています。わがまちにプロのオーケストラがあれば一番良いかもしれません、財政的に難しいのは明白です。そこで、経済的リスクを最小限にしながら、それに近い効果をもたらすものとして地域拠点契約を結ぶことになりました。

新日本フィルを選んだのは、1972年、指揮者・小澤征爾さんの呼びかけで自主運営のオーケストラとして創立した日本でも屈指のオーケストラで、高水準な芸術性と優れた人材を持っていること、そして決め手は、東京都墨田区と日本初のフランチャイズを導入し、地域と連携したコミュニティ・プログラムを日常の活動として展開しているという経験と技術集積でした。2008年度の最初の公演は音楽監督クリスティアン・アルミンク指揮でベートーヴェン作曲の『運命』。この公演にはたくさんの人がくることは予想がつきましたが、「続けていくと飽きられてしまうのではないか?」と少しばかりの不安がありました。しかし、年を

重ねてたくさんの市民と交流してきたことで、演奏家一人ひとりと市民が繋がりはじめ、『わが町のオーケストラ』というような「身内意識」に発展してきたことで、演奏会にも多くのお客様が足を運んでくださいます。楽団員も「また、あのお客様と会えるのね」「可児に行くのが楽しみ」など話し、15年間の積み重ねがお互いの絆を強くしたこと、『可児市は第二の故郷』と思っていただけているのではと感じています。それらを象徴した出来事は、コロナ禍の2021年2月に行われた演奏会でした。アンコールで『シンニチテレワーク部』で話題となった『パプリカ』を演奏。楽団員も2020年3月以来の演奏だったそうで、

「これから自分たちはどうなってしまうのか?」という不安の中で、必死にもがいていた時を思い起こして、涙ぐむ場面も。また、お客様の中にも、その姿と自分たちを重ね合わせ涙ぐむ様子も。舞台上と客席が一体となり、コロナ禍の長く苦しい自粛生活を互いにいたわり、互いに思いやる空気が生まれ、そして会場全体が希望に満ちたことは、互いの『深い絆』の証であると感じました。これからも地域拠点契約の活動を通して、『音楽が持つ力で、人々が繋がり、互いを思いやり、希望が持てる』ような関係を目指していきたいです。



鑑賞ではなく
コミュニケーションを
主軸にした
プログラムを実施
(2019年度)

新日本フィルハーモニー交響楽団メンバーによる オープン・シアター・コンサート

障がいのある方、小さなお子さまなど普段、劇場に足を運んで音楽に触れることが難しい方でも安心して楽しめる、誰にでもオープンなクラシックコンサート。



公演 6/24 会場 ala 主劇場 集客数 272人
出演 新日本フィルハーモニー交響楽団メンバー 13人

新日本フィル 音楽アウトリーチ

地域拠点契約を結んでいる新日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーが学校や地域におじゃまして、クラシック音楽を身近に感じてもらえるコンサートを開催。



日程 6/21~23 実施回数 7回
会場 桜ヶ丘小、兼山小、土田小、東明小 参加者数 266人
出演 新日本フィルハーモニー交響楽団メンバー
(ヴァイオリン: 田村直貴、深谷まり
ヴィオラ: 間瀬容子 チェロ: サミュエル・エリクソン)



文学座



文学座とつくるファミリー舞台の様子（2017年度）

2008年度よりアーラは、国内で最も歴史のある劇団（1937年創立）であり、日本演劇史に残る舞台を数多く世に送り出している「文学座」と地域拠点契約を結んでいます。毎年の公演に加え、市民参加での作品づくりや、地域へ出向いての朗読会など、作品上演に留まらない包括的な提携契約となっています。文学座は、高水準な芸術性に加え、さまざまな対象・場面に合わせたワークショップが展開できる人材を多く抱えていることが選定理由に挙げられています。毎年の公演では、劇団員を間近に感じることができAtPathのアフタートークで観劇の感想を共有しながら作品の世界観をより深く楽しむことができます。2019年『ガラスの動物園』では、地元高校演劇部の皆さんに、演出家自らが舞台セット見学ツアーを行いその意図や仕組みを解説するなど鑑賞する

だけに留まらない付加価値があります。公演と同様に重きを置いているコミュニティ・プログラムでは、プロから技術を学ぶことができる「演劇ワークショップ」や「朗読ワークショップ」、劇場に足を運ぶことが困難な高齢者施設の方々などへの「おでかけ朗読会」を地域拠点契約開始時から行ってきました。そして「個人の技術向上を目指す」ワークショップから、「成果を地域に還元」するものへと発展させるために、「文学座と作る子ども向け芝居（演劇WS実践編）・紙芝居（朗読WS実践編）」が生まれました。短期間で小作品を創作し地域の子ども達に届ける、この循環があつてこそ地域劇場が活動を支える意義があります。実践編で作り上げた作品はその後、WS参加者を中心に立ち上げられた「アーラ紙芝居一座」のレパートリーとなり独自に児童センターや

こども食堂などで上演されています。また、「おでかけ朗読会」は、偶然ご覧になった先生からの「中学生にも聞かせたい」との言葉から中学校へも届けることになりました。思春期で多感な時期の子ども達に家族について考えるきっかけとなるよう「母への手紙」をテーマに掲げました。地域拠点契約の枠を超えた象徴的な出来事として、県立高校での演劇表現ワークショップがあります。文学座の演出家と俳優が講師となり、生徒の自己表現力とコミュニケーション能力の向上を目指すもので、アーラの事業ではなく、アーラが文学座と高校の橋渡しとなったプロジェクトです。開始して3年目には、毎年40人ほどいた中退者が9人にまで激減し、遅刻者や問題

行動までもが減少するという成果が出ました。その後プロジェクトは岐阜県教育委員会と文学座による連携協定締結にまで発展しています。

地域拠点契約の枠外では他にも、ala Collection シリーズや大型市民参加事業での文学座所属演出家や俳優の登用、可児市が主催する「可児市文芸祭」では受賞作品を文学座俳優が朗読する朗読会も行われています。

市民や地域が抱える課題へ立ち向かうために何ができるのか、知恵を出し合い共に考えることができるパートナー『わが町の劇団、文学座』。人と接することが制限されたコロナ禍を経て、人と関わることでしか成立しない演劇の力がいま再び試されています。

文学座とつくるファミリー舞台「猫の事務所」

市民と文学座の演出家でつくる親子向けの舞台公演。宮沢賢治の「猫の事務所」を8日間の稽古で、楽器の生演奏も取り入れた、親子で楽しめる作品に仕上げました。



稽古	4/23.24、4/29.30、5/1～4（計8回）
公演	5/5（計2回）
会場	ala演劇練習室
集客数	44人
講師	原作：宮沢賢治 脚色・演出：稻葉賀恵（文学座）
参加者数	13人

文学座俳優のキッズワークショップ

文学座俳優による本格的な子ども向け演劇ワークショップ。ミュージカルのワンシーンに挑戦。最終日には家族を招いたミニ発表会を開催しました。



日程	ワークショップ：8/20.21 ミニ発表会：8/21
会場	ala演劇ロフト
集客数	32人
講師	高橋ひろし（文学座）、磯田美絵（文学座）
参加者数	12人
ピアノ伴奏	福井明日香



「地域への還元」として機能しているアーラ紙芝居一座の活動（2018年度）

おでかけ落語会

プロの落語家が中学校に赴いて実施する落語のアウトリーチ。落語を聞くだけでなく、所作も体験してみるなど日本の伝統芸能の魅力を知るひととき。



日程 10/25～28 実施回数 7回
会場 東可児中、西可児中、広陵中
中部中、蘇南中
参加者数 841人 出演 桂やまと
協力 可児市教育委員会

「かに寄席 納涼・初席」など、これまで落語公演を行ってきたアーラですが、今年初めて落語のアウトリーチを行いました。出演は真打として活躍する落語家の桂やまとさん。アウトリーチは市内の全中学校の中学生2年生を対象に行われました。会場ではアーラの職員が毎回高座を組むなど、本格的な落語を生徒の皆さんに楽しんでもらうための準備が行われました。やまとさんはまず「落語」についてお話し、手ぬぐいや扇子を使っての落語の所作や人物の演じ方を説明。その後、「子ほめ」

一席演じました。どの会場でも生徒の皆さんのがよく、いたるところで笑い声が起ります。質問コーナーでも生徒から次々とやまとさんへ質問が飛び出しました。アンケートでも「テレビで見ると迫力が違い面白かった」「一人で何役も演じていてすごいと思った」といった声が寄せられ、落語への関心が高まったようでした。日頃接する機会の少ない日本の伝統芸能ですが、こういった場を通じて改めてその良さを実感してもらえる機会を提供できたのではないかと思いました。

音楽と中学生、 一五一會な出会い♪



みんなが演奏者! 一五一會ライブ!

可児市が世界に誇るギターブランド<ヤイリギター>と人気ミュージシャンBEGINの共同開発で生まれた世界一簡単に弾ける楽器「一五一會」。ヤイリギター公認講師指導のもと中学生が演奏体験。

日程 5/18～20 実施回数 6回
会場 西可児中、広陵中 参加者数 170人
講師 堀部勝彦 (ヤイリギター公認 ケイティクラブ公認一五一會インストラクター)
アシスタント 竹中千晶 協力 可児市教育委員会、(株)ヤイリギター

5月のそよ風が気持ちいい気候の中、可児市内の中学校に出かけて、可児市のギターメーカー、ヤイリギターの「一五一會」合奏ライブを初めて実施しました。

講師は、ヤイリギター公認の一五一會インストラクターの堀部勝彦さん。ライブの前に生徒さんにいくつか質問すると、一五一會のことを知っている人はおらず、ヤイリギターのことを知っている人もほとんどいませんでした。

そんな中、堀部さんがおもむろに一五一會を奏で始めると、みんながその柔らかい音色に耳を澄ませました。一五一會は沖縄出身のバンドBEGINが「三線とギターをチャンプルー(ごちゃまぜ)した楽器を作りたい」と想い、ヤイリギターとコラボレーションして作った楽器です。その音色は、どことなく和風で、沖縄の風景を思い出させるような少し懐かしい気分になります。

聴くだけでなく、生徒一人ひとりに一五一會を貸し出し、実際に弾いてもらいました。一五一會はギターと違い、4本の弦を人差し指1本押さえるだけで比較的簡単に弾くことができます。はじめはなかなか上手く弾けなかった生徒たちも、堀部さんの丁寧なレクチャーで徐々に弾けるようになっていきました。

最後は、堀部さんと生徒の「涙そうそう」の合奏ライブ。堀部さんの歌と、周りの人が奏でる音に耳を澄ませながら弾き切りました。体験した生徒たちからは「家のギターは上手く弾けなかったけど、一五一會は簡単で音もきれいでまた弾いてみたい」「友達と教えて絆が深まった」「(クラスで)話せる人が増えました。ほんとに一期一会だなあと思いました!」という声が挙がりました。そこには音楽を通じた新しい出会いがありました。



大型市民ミュージカル 「君といた夏～スタンドバイミー可児～」

約100人の市民が参加してオリジナルミュージカルの上演を行う、大型市民参加事業

日 程
出演者オーディション：9/23～25
稽古：10/22～3/3（計44回）
公演：3/4.5
会 場 ala 主劇場 **集客数** 1,474人
参 加 者 数 出演者：92人 市民サポーター：14人
講 師
作：瀬戸口 郁
作曲・音楽監督：上田 亨
演出：黒田百合
振付：神崎由布子
歌唱指導：満田恵子
振付/振付助手：酒井果菜未、作本美月
演出助手：三井恵子、所村佳子、堀江ありさ
殺陣指導：橋本征弥（株ジャパンアクションエンターブライズ）
殺陣指導助手：堀江悟
協 力 旭小、（株）ケーブルテレビ可児
星野京子
後 援 可児市、可児市教育委員会

みんなで叶えた奇跡の公演
舞台上に立つ!
絶対このメンバー全員で

アーラでは、2008年度より毎年、大型市民参加プロジェクトを実施しています。3年毎に、ミュージカル、翌年はコンテンポラリーダンス、翌々年は演劇という流れをとっており、毎回100人程の市民が参加しています。制作過程において、多くの市民が関わり創りあげていくことで、参加者同士の絆を育み、地域への愛着を深めることを目的にしています。また、プロのスタッフ・キャストの方々と共に演することにより、市民の創作意識を高め、地域の活性化を図っていきます。2011年度の初演から3年毎に再演してきた市民ミュージカル「君といた夏～スタンド

バイミー可児～」、通称“キミナツ”。4回目の上演となるはずだった2020年度は新型コロナウィルス感染症の影響で開催中止に。2021年度、参加者たちの動画で紡いだ「キミナツムービー」を経て、2022年度、待望の再々々演となりました。とはいって、オーディションを開催した9月の時点ではコロナはどうなるかわからない状況。応募者が少ないので…と心配しましたが、ふたを開けてみれば前回を超える応募をいただき、最終的に、6才から70代後半の方々まで、92人のキャストと、市民サポーター 14人、総勢106人が集まりました。ホッとしたのも



つかの間、プロのミュージカル界では出演者のコロナ感染により公演中止の報道が。ガイドラインの参考にと聞いた感染症対策は、市民ミュージカルではとても真似できないような徹底ぶり。それでも感染者は出てしまう。「全員で舞台に立てるのだろうか…？」しかし、心配ばかりでは前に進めません。ただでさえ3年に一度の市民ミュージカルが、2回も中止になっている。人と人が満足に会えないコロナ禍だからこそ、人と人が繋がる文化芸術が必要なはず。講師のみなさんとも相談しながら、「出来る

ことは全部やる！絶対中止にしない！」そんなことを宣言し、10月から、感染症対策を講じながらの稽古がスタートしました。検温、消毒、マスク着用の徹底。リスクを小さるためになるべく食事を挟まず、人数を制限した稽古スケジュール。会食禁止、差し入れ禁止。コミュニケーションが断絶されてしまう「感染症対策」は、キミナツ本来の魅力をどこか奪ってしまうものありました。しかし、年が明けた1月。通し稽古でようやく全員と会えた喜び。世代や性別に関わらず、急速に仲良くなっていく参加者たち。世代を超えたヒット曲がないと言われるこの時代、多世代が同じ歌を歌える喜びは、何事にも代えがたい時間がありました。そしてついに公演当日。誰一人欠けることなく、全員が舞台に立ちました。一人ひとりの熱意はもちろん、市民サポーターのみなさんの献身的な支えや、ご家族のサポート、そして講師陣の愛情深いご指導があってこそこの奇跡でした。ここには書ききれない、大小さまざまな事件もありました。稽古も決して楽なものではなかったと思います。しかし、それらを乗り越えたのは、ここに集った仲間たちとの絆があったからだと確信しています。それはまさにキミナツのテーマもあります。キミナツという物語の裏で、無数の物語が育まれていたのです。公演後、小劇場に集まってみんなで小さな“お疲れさま会”を開きました。泣き笑いで歌い合った「君といた夏」は、一生忘れることはないでしょう。次のキミナツで仲間たちとどんな再会が果たせるのか、今からとても楽しみです。

「君といた夏」 参加者の声



今回の「君といた夏」はきっとこの先も、心の中で僕に勇気を与えてくれる。その理由は2つある。1つめは憧れの、主役のミノル役を演じたことだ。主役に憧れを抱き、ずっとやりたかったこの役。しかし、たくさんのダメ出し。ミノルになることの難しさに悩んだ。でも、リリアン*がいつもそばでアドバイスをくれた。僕だけのミノルになれと励ましてくれた。主役のミノルを務めきったことが、ぼくに勇気と自信を与えてくれた。

2つ目は大切な仲間ができたからだ。踊りや動き、セリフを合わせてみんなで成功に向けて高めあった大切な時間。笑い合って、励まし合って、感動を共有したこの時間はもう戻って来ない。しかし、大切な時間として僕の心に残っている。君夏に出会い、僕の世界が広がった。ずっと君夏が続いていきますように。

*演出の黒田さんのニックネーム



「君といた夏」は2011年度から毎回参加しています。家族の絆、新たな出会い、そして仲間へと作品が導きます。今回、大人の誠役に初挑戦。かなりのプレッシャーが襲ってきました。しかし、講師の皆さんのお指導、スタッフ、共に参加する仲間一人ひとりの努力がひとつになり頑張ることが出来ました。参加して良かった。
忘れない、忘れない、あの時を!
あの感動をもう一度...! ありがとう。



私は初演（2011年度）から参加していて、今回で4回目でした。毎回いろんな人と繋がりができ、刺激をもらってとても楽しかったです。100人近い人が気持ちを合わせて、ミュージカルを作り上げていくプロセスが楽しく、お客様から拍手をもらった時の達成感が忘れないで「君といた夏」は私にとってライフワークになっています。



僕は、このミュージカルの初演に主役のミノル役で参加しました。主役に選ばれた時は、とても嬉しく最初は正直浮かれていました。稽古が始まり先生から「君は座長だからね」と言わされた小6の僕はその意味を分かっていなかったのですが、稽古を通じてスタッフの方や大人キャストの方から助けを受け仲間の大切さ、そして座長という責任の重さを知る事が出来ました。そして3度目の参加になる今回、主役の5人を見ているとあの頃の自分を見ている気がして、懐かしさを感じると共に、自分の新しい役に浸れるという素敵なお時間も味わう事が出来ました。段階を踏んで色々な役に挑戦出来る、それが君夏の良さです。そんな貴重な体験ができるこの君夏がこれからも続けて欲しいと感じています。





児童・生徒のための ココロとカラダワークショップ

市内小中学校児童・生徒を対象に行うクラス単位のコミュニケーション・ワークショップ。自分を伝え相手を受け入れる力を養います。



コミュニティ・アプローチ

心のディスタンスを埋め、
交流することの楽しさを
再発見する活動

「児童・生徒のためのココロとカラダワークショップ」は、子ども達の自己表現と他者理解の力を育むため、2013年の市内小学校・特別支援学級でのトライアル実施から始まりました。翌2014年にはモデル校で年間を通して複数回実施し、活動が進むにつれて子ども達がココロとカラダを開放し表現することを楽しみ、クラスの仲間たちと積極的に関わり合う姿を目の当たりにした先生方から活動内容が評価され、その後の実施数も可能な限り限界まで伸ばすことになりました。2018年・19年には、市教育研究所より先生を対象としたコミュ

ニケーション・ワークショップの研修依頼もあり、学校における本ワークショップの認知度も高まりました。しかし、2020年・21年とコロナ禍により活動は中止を余儀なくされ、22年には再び全日程の開催が実現しましたが、マスクを着用し広い空間で実施という制限つきのものでした。これまでに累計287クラス、8,764人の子ども達へ活動が届けられていますが、子ども達の表情が読み取りにくい状況下での実施は、それまでよりも一層お互いのココロが通い合えるよう、皆で一緒に活動することが楽しいものであると感じ

日程 4月～7月、10月～12月 実施回数 30回 会場 市内小学校11校 参加者数 854人
講師 新井英夫チーム(体奏家、ダンスアーティスト)、Ten seeds(劇・あそび・表現活動)
共催 可児市 協力 可児市教育委員会

てもらえるよう、丁寧に内容を組み立て集中して観聴きする練習からアイコンタクトや仲間集め、個人の表現で相手に伝えるものからチームで表現をつくるものまで、プログラム、そして声掛けにも力が注がれた一年となりました。

ワークショップを体験した先生方からは、次のような声が挙がりました。

「相手の目を見て、気持ちを伝え合うことが少なくなっている中で、顔の表情が読みづらくてもお互いの考え方や気持ちを伝え合うことの大切さを実感しました。お互いのことを意識して心を合わせて活動できたこの時間は、児童たちにとっても担任にとっても喜びや発見の

多い楽しいひとときでした」
「普段の授業では、根拠を説明しましょうと発表を促してもそれほど挙手がありません。『伝える』ことが苦手なのかなと思っていましたが、ワークショップではどんどん新しい意見や工夫が出てくるのが驚きでした」

コロナ禍を経て、以前よりも増して子ども達の「やりたい気持ち」を汲み上げ、「自分を表現」したり、「人と関わる力」を身につけるために本ワークショップが力を発揮すると感じています。普段の学校生活でも活用できるよう、先生を対象としたワークショップについても教育委員会と協力のうえ進めていきたいと思います。



風が見える!
海の中みたい!
「風のじゅうたん」
(2018年度)



アーラ未来の 演奏家プロジェクト

若手演奏家2人が可児に滞在し音楽づくり。5日間の滞在期間中、様々な音楽交流プログラムを重ね、音楽を通じたコミュニティづくりを行います。



日 程	6/1~5 実施回数 7回
会 場	ala 小劇場・美術ロフト・演劇ロフト 帷子小、今渡南小
集 客 数	アーラ未来の演奏家コンサート:77人 斎藤 龍ピアノ・リサイタル:91人
参 加 者 数	延べ573人(アウトリーチ、コンサート含む)
出 演	斎藤 龍(ピアノ)、篠塚友里江(クラリネット)
コーディネーター	佐野秀典

2014年から始まった「アーラ未来の演奏家プロジェクト」。将来有望な若手演奏家が可児市に滞在し、音楽づくりを通じて地域のコミュニティとの交流を図るとともに、アーラの考える「未来の演奏家」像を実践して演奏家としての幅を広げていくというプロジェクトで、これまでに9人の演奏家が参加し、約5,000人の市民と交流をしました。

期間中は館内でのロビー・コンサートや公開リハーサル、コンサートのほか、小学校へのアウトリーチなど盛り沢山な内容で、

様々な場面で地域の皆さんとの交流が生まれます。来場者の中には毎日来てくださる方もいて、日が経つにつれて顔なじみになってくるほど。アウトリーチに訪れた小学生の皆さんもアーラに遊びに来てくれて、演奏家は普段舞台で演奏するだけでは得ることのできない経験をアーラでしていきます。こういった経験は地域の皆さんにとって忘れられない思い出になっていくだけでなく、演奏家にとってもアーラや可児のまちがかけがえのない場所になっていくに違いありません。

コーディネーター

佐野 秀典 作曲・編曲家

演奏家が地域とつながりを持って共に音楽を作り上げていくことはできないのか?そんなきっかけで始まったのが「アーラ未来の演奏家プロジェクト」。色々な思いをみんなで分かち合い可児で生まれて育った音は、参加していた皆様、そして演奏家の心に強く残って、そのつながりと思い出が、元気に繋がって未来へと歩んでいます。



森山威男ドラム道場

可児市在住の世界的ドラマー・森山威男氏によるドラム講座。幅広い層の人が参加し、ドラムを習いながら、時には互いに教え合って演奏技術の向上を目指します。



日 程	通年 毎週月曜日
実施回数	48回
会 場	ala 音楽ロフト
集 客 数	延べ216人
講 師	森山威男

歌舞伎とおしゃべりの会

2004年から続く歌舞伎講座。歌舞伎初心者には分かり易く、上級者にはさらに楽しいものを、おしゃべり感覚で勉強できる催しを開催しています。

公 演	4/24、6/11、8/6、2/18、3/18
会 場	ala 小劇場・映像シアター
集 客 数	382人
講 師	中村橋吾、木ノ下裕一 葛西聖司
ゲ ス ト	松井 誠、藤舎理生 可児歌舞伎





劇場フロントスタッフ 養成講座

劇場フロントスタッフ活動をはじめたい方を対象に、専門の講師を招いて座学と実技を学ぶ講座。基礎知識と技術を学び、活動への足掛かりを作っています。また、活動中の方のフォローアップ研修も行っています。



日程	座学編:6/26 実技編:7/10 フォローアップ研修:1/9
会場	ala主劇場 ほか
参加者数	延べ42人
講師	星乃もと子 (Theatre Management Plan Co.,Ltd. 代表)
協力	NPO法人alaクルーズ



alaクルーズは、アーラを拠点に活動する文化ボランティア団体として、アーラ開館前の2001年11月に設立されました。その後、2004年11月には、『特定非営利活動(NPO)法人』として認証を受けました。

alaクルーズは、自主運営するボランティア組織として、イルミネーション事業や展示事業などを実施するとともに、アーラが行う様々な事業に協力しており、現在は約30人の市民が活動を行っています。その一つが、劇場フロントスタッフ活動です。

劇場フロントスタッフとは、コンサートや演劇公演などで、チケットもぎり・客席案内・場内監視などを行うスタッフのことです、市民が制服を着ていつも笑顔でお客様をお迎えし、鑑賞体験をサポートしています。お客様を最前線でお迎えする、「劇場の顔」として大切な役割を担ってください

ります。他の多くの劇場と異なり、その大切な役割を、市民ボランティアが「プロにも負けない」気持ちで活動しているのが、大きな特徴です。そのような大切な劇場フロントスタッフを担うには、やろうと思ってすぐにはできるものではありません。アーラでは毎年プロの講師を招いて「劇場フロントスタッフ養成講座」を開催し、プロのスタッフと同じ知識と技術を学ぶ「座学と実技」の講座を開催し、そのノウハウを身に着ける機会を設けています。

また、既に劇場フロントスタッフとして活動中のalaクルーズメンバーも、実際の公演を使ったフォローアップ研修を毎年受講して、知識と技術の向上に努めています。活動中のみなさんは、「普段の家庭や会社での自分とは違った自分になれて楽しい」などと話し、いきいきと輝いて活動しています。



アーラ映画祭2022

映画を通して多様な人が交流してつながりをつくることで、新しい価値観に出会う場をつくり、参加する人の人生を豊かにするプロジェクト。

公演	11/5.6、11/13.14(計11回)
実施回数	22回(ミーティング)
会場	ala 映像シアター
集客数	641人
参加者数	実行委員:延べ219人
ゲスト	タナダユキ (『浜の朝日の嘘つきども』監督) 横浜聰子(『いとみち』監督)
主催	アーラ映画祭実行委員会

アーラ紙芝居一座

文学座の演出家を招いたワークショップにより結成されたアーラ紙芝居一座。演劇好きの市民で構成されたメンバーが地域の子ども達の為に活動を実施。演劇的要素を取り入れたこれまでにないスタイルの紙芝居作品によって子ども達に鑑賞の機会を提供しています。

公演	1/21、3/26
会場	可児市子育て健康プラザマーノ ala G階共有スペース
集客数	62人
参加者数	延べ12人



平田オリザの 「対話を考える」モデル授業

劇作家・演出家として活躍する平田オリザ氏を講師に迎え、「教育現場で活かすコミュニケーションとは何か?」を学びます。



日程	7/29
会場	ala レセプションホール
参加者数	20人
講師	平田オリザ(劇作家・演出家)
協力	可児市教育委員会



コミュニケーション・アプローチ

ちびっこ鑑賞体験事業 「ぐうちよっぱつ劇場!」

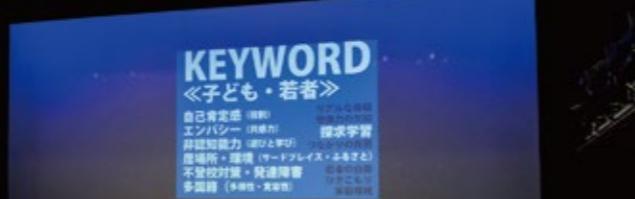
豊かな感性を発達させる上で大事な時期である乳幼児期の子ども達に、「ただ見る」だけではない、それ以上の「体験」となる舞台を届けます。



公演	11/24,25
会場	ala レセプションホール
集客数	250人
出演	アフタフ・バーバン (平川恭子、清水洋幸、さとうりつこ)
主催	学校法人 大日学園

まちが元気になる処方箋

アーラの館長がゲストと共に文化による
まちづくりについて語り合う公開座談会。



公演	4/20
会場	ala 小劇場
集客数	114人

出 演 中貝宗治(一般社団法人豊岡アートアクション理事長)
堀部好彦(可児市教育長)、篠橋義朗(ala館長)
協 力 可児市教育委員会



JAPAN LIVE YELL project in CHUBU 劇団うりんこ ベイビーシアター「MARIMO」

0~24か月の乳児を対象に、パフォーマーと乳児たちとで織り成す体験の芸術。知覚の発達を促し、生涯にわたる人格形成の基礎を培う手助けを目指します。



公演	8/4(計2回)
会場	ala 演劇ロフト
集客数	24人
演出	ジャッキー・e・チャン(韓国)
出 演	劇団うりんこ(和田幸加・鷺見裕美)
助 成	文化庁「大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業(地域連携型)」
主 催	(公財)可児市文化芸術振興財団 愛知県芸術劇場 (公社)日本芸能実演家団体協議会



今日何回笑つた?
ボーダーって何だろ?

多文化共生プロジェクトは、2008年からスタートしました。初期の5年は田室寿見子さんが演出を手掛け、2013年から文学座の森さゆ里さんにバトンタッチして5年、2018年から鹿自由紀さんにバトンタッチして5年となりました。演出家が代われば当然、作品の表現も変わり、参加者のインタビューを基にしたドキュメンタリー演劇もあれば、美術工作の要素を取り入れた体験型演劇ツアー、クレイアニメーションの映像作品、リモート収録を取り入れた舞台作品等と作品の形態は多岐にわたります。国籍はブラジル、フィリピン、中国、

韓国、トルコ、ボリビア等、多様な国にルーツのある人が延べ458人、15年を通して参加し、入場者数は2,980人となりました。本プロジェクトでは、何人かのアドバイザーがおり、主にそのアドバイザーを介して「知り合いの知り合い」というつながりを経由して参加者を集めます。そのアドバイザーの1人が住吉エリオ洋一さんです。エリオさんは日系ブラジル人で、23年前に来日して、可児地域のブラジル人コミュニティと日本人コミュニティを繋ぐ役割を果たしています。プロジェクト初期から出演者として参加し、今ではアドバイザーとして

大切な役割を担っています。そのような人のつながりで参加者募集が成り立っています。2022年『BORDER』での印象的な参加者は、マツバラ ルイス マサオさんという日系ブラジル人の70代の男性です。この方もエリオさんの知り合いで、20年間、自動車部品工場で働いていましたが2年前に失業し、人との関わりを失い、閉じこもる日々を送っていました。エリオさんはマツバラさんに、道路の草刈りなど地域のボランティア活動への参加を助言してマツバラさんが徐々に元気を取り戻したタイミングで、プロジェクトへの参加も助言しました。はじ

作品一覧

2008年	『East Gate』	構成・演出：田室寿見子
2009年	『危機一髪』	
2010年	『夏の夜の夢』	
2011年	『最後の写真』	
2012年	『顔／ペルソナ』	作・演出：森さゆ里
2013年	『ねこネコだいぼうけん』	
2014年	『星くず降る夜のだいぼうけん』	
2015年	『むかし昔のそのむかし』	
2016年	『ミツバチぶんぶんハチミツぶん』	
2017年	『えんげき工作アトラクション』	
2018年	『ある夜、あるBarにて』	
2019年	『にぎやかなお葬式』	
2020年	『Trabalho～ある、わたしの人生～』※映像作品	作・演出：鹿自由紀
2021年	『こころの井戸』	
2022年	『BORDER』	

日 程 稽古：6/25～8/13（計14回）

公演：8/14（計2回）

アウトーチ：2/11

会 場 ala演劇ロフト、土田地区センター

集 客 数 91人

参 加 者 数 出演者：17人（延べ206人）アウトーチ：20人

講 師 脚本・演出：鹿自由紀 演出補助：カズ祥

アドバイザー 住吉エリオ洋一、山田久子

協 力 NPO法人可児市国際交流協会

可児市土田自治連合会

めは恥ずかしそうにしていたマツバラさんでしたが、稽古を重ねるたびに他の日本人含む参加者とも仲が良くなり、やがて居場所を見出し、ついには舞台に出演することとなりました。舞台上で他の誰よりも楽しそうに演じ、終演後アフタートークに登壇したマツバラさんの笑顔が印象的でした。現在も可児市内のどこかの道路で草刈りやゴミ拾いをしているマツバラさんを見かけたら声をかけてあげてください、きっと喜ぶと思います。

このように国籍問わず人と人のつながりで成り立っているのが、多文化共生プロジェクトです。これからも、このような国籍を超えたつながりの場を作っていくます。



住吉エリオ洋一さん



マツバラ ルイス マサオさん

スマイリングワークショップ

不登校児童・生徒が通うスマイリングルームでの、演劇、音楽、ダンス、美術等を織り交ぜたコミュニケーションワークショップ。



様々な事情から学校に行きたくても行けない子ども達が通う教室、可児市教育研究所のスマイリングルーム。およそ15~20人程度の子ども達が毎日スマイリングルームに登校しています。そんなスマイリングルームの子ども達の自己肯定感を高めることにつながればという思いから、本ワークショップは、「新井英夫のバリアフリーワークショップ」の一環として2011年に初めて実施されました。2013年から通年化し、1年に10回ほどのペースで継続して実施しています。

体奏家・ダンスアーティストの新井英夫さん

と、演劇手法を取り入れたワークショップを行うTen seedsさんの2組の講師がスマイリングルームに出向き、10年間で延べ500人を超える子ども達と自然と心と体がほぐれるようなコミュニケーションワークショップを行ってきました。はじめは大人しく、遠慮がちだった子ども達も回数を重ねるうちに、徐々に笑顔の回数が増え、積極的に自分を表現するようになっていきます。また、最初は見学だけで、仲間の輪に入ることができなかった子どもが、みんなの楽しそうな様子を見て「私もやりたい!」と参加できるようになったこともあります。

日 程	4月~7月、10月~12月
実施回数	9回
会 場	可児市総合会館 ほか
参加者数	延べ57人
講 師	新井英夫(体奏家、ダンスアーティスト)
共 催	可児市
協 力	可児市教育委員会

2020年から2年間、スマイリングルーム室長を務めた成瀬英員さんは、以前このように語っています。

「子ども達にとって、この小さなスマイリングルームでも非日常の体験ができることが幸せです。(中略)お互いがよい影響を受けあってサポートしあえる仕組みができるんじゃないかなと感じました。また、そういう仕組みを通して、子ども達の中に自信や自己肯定感が高まってくるのではないかと感じました」(2020年ala TIMESより抜粋)

そんなスマイリングワークショップもコロナウイルス感染症の影響を受け、2020年はリモートでの実施、2021年は中止を余儀なくされ、対面のワークショップが実現したのは2022年でした。約2年ぶりということ



もあり、スマイリングルームに通うメンバーも代わり、講師陣とはじめましての状態からのスタートでした。はじめは緊張している様子もありましたが、集まつたみんなで楽器を奏でたり、身体を使って自分を表現したりするうちに自然と表情がほぐれていきました。後半にはアーラの水と緑の広場の芝生の上で大きな風船を飛ばしたり、最終日にはアーラ主劇場を使用して、楽器を奏でるワークを行ったりしました。最後に担当のスマイリングスタッフが、「あの子のこんな生き生きとした姿見たことなかったです」と、ある生徒のことを嬉しそうに語ってくれた姿がとても印象的でした。「劇場」であるアーラだからこそできる、非日常を仲間と共に体験できる、そんなワークショップになったのではないでしょうか。今後も、子ども達が「自信」や「自己肯定感」そして他人と関わる「コミュニケーション能力」を育み、伸びやかに自分らしく生活していくよう、どのようにサポートできるのかをスマイリングスタッフの方と共に考え、ワークショップを実施していきたいです。

障がいのあるなし関係なく 思い切り音楽を楽しむ機会



インクルーシブ・アプローチ

みんなの ディスコ2022

障がい、国籍、年齢、性別、全ての垣根を越えて音楽、ダンスでココロがつながる空間。



日程 6/18
会場 ala 演劇ロフト・美術ロフト
参加者数 54人、みんなのディスコサポーター 10人
出演 MC: うたのギリギリおにいさん (川名洋行)
ドラムサークルファシリテーター: 中村陽子
DJ: AKIRA, KZY, KYORO

「障がいのある方って、社会的な環境からどうしても施設や自宅に引きこもった生活になってしまって。公共の場でみんなで何かと一緒に楽しむ経験がほとんどないんです」

ある障がい者施設の職員さんの言葉です。「障がいのある方も誰もが一緒に楽しめる企画がやりたい、いや、公共施設で働き、文化芸術というものに携わっている自分たちがやるべき事もあるんだ」そんな思いから、誰もが思い思いに楽しむことができる“音楽”と“ダンス”的空間『みんなのディスコ』は2016年に誕生しました。手探りながらも企画に賛同し協力してくれるDJ、ミュージシャン、ダンサーそして市民サポーターが集まり、皆のアイディアを持ち寄って毎年趣向を凝らした手作りのディスコ会場が生まれます。ディスコ絶対条件

のミラーボールを中心に掲げ、「七夕」や「ハロウィン」をテーマにしたり、「恥ずかしい」という人のために仮装グッズやフェイスペイントを設置したり、コロナ禍ではオンラインでのファッションショーまで開催しました。大音量のリズムに身を任せているうちに気持ちが開放されて、誰もが「自分は自分のまでいいんだ」と踊り弾けます。その日一日アーラはまちの「ディスコ」に変身します。『みんなのディスコ』にはこれまで累計700人近い方が参加しています。出会いから地域が抱える課題に気づき、皆の知恵と力を合わせて誰もが楽しめる場をつくり上げ、と一緒に楽しみ合う。劇場のもつ施設というハード、そして協力者というソフトはまだいろいろな活用法を秘めています。

多様性は、可能性



エイブル・アート展 -アートの奥行き-

障がいのある人の可能性(エイブル=able)に注目した展覧会。テーマに沿って選ばれた全国の障がいを持つアーティスト達による、魅力的なアート作品を展示しています。

日程 7/16～24(計8日)
会場 ala 美術ロフト
集客数 656人
共催 可児市
企画 (一財)たんぽぽの家
(社福)わたぼうしの会
(公財)岐阜県教育文化財団
協力 TASCぎふ

口からこぼれます。多様性のある社会が如何に楽しく豊かなものか理屈抜きで体現する、それこそが「可能性の芸術」なのです。2021年に開催した、誰もが自由に表現活動ができる『みんなのオープン・アトリエ』では、子ども達や障がいのある方々が中心に参加してくれました。企画実施したTASCぎふのスタッフさんは云います。「社会は変化を求めるようとする。でも、変化を求めず、ありのままを受け入れる場があつてもいいのではないか」参加者が自由に思い思いに描いている姿を見ているとその言葉が胸に沁みます。何かを表現することは他者の目に晒され、恐れや勇気を伴います。ありのままの自分が安心して表現できる場所は、今の社会では作りづらいことなのかもしれません。でも、だからこそ人々はそういう場を求めているのでしょうか。



ココロとカラダの健康ひろば

60代以上を対象としたコミュニケーション・ワークショップ。継続的な参加によって、楽しみながら健康維持と新たなコミュニティづくり。



日程	4月～7月、10月～12月
実施回数	20回
会場	ala レセプションホール ほか
参加者数	232人
講師	新井英夫チーム (体奏家、ダンスアーティスト) Ten seeds(劇・あそび・表現活動)

「ココロとカラダの健康ひろば」は、高齢者の孤独防止、仲間づくりや生きがい発見の場として2013年に始まりました。運動機能の維持・向上を促すことで閉じこもりの予防に、また日常生活での不安や愚痴を聞き合える仲間づくりも孤立防止に繋がります。参加者は、10年間で延べ2,427人になります。(※2020年・21年は対面・オンライン並行)アーティストが講師を務め、参加者は各自のペースで無理のない範囲で体を動かし、想像力や創造力を刺激する知的活動で、ココロとカラダが開放されていきます。気がつくとまるで昔からの友人のような関係性が築かれ、ワークショップ終了後の「お茶のみタイム」では、楽しい話題から抱えている悩みの話まで飛び交います。コロナ禍で活動が制限された2020年・21年は、通信環境が整っている方はご自宅から、ない方でもオンラインWSに参加できる

ようサテライト会場を設け、繋がりが途絶えてしまわないよう心掛けました。画面越しに互いの体調を気遣い、近況を伝え合い、固まった体を解す体操や発想力が試されるジェスチャーなどを通して、明るい笑い声が重なり合い、まさに「支え合い」の関係となっていました。

全日程で対面での活動が実現できた2022年は、「自分たちが楽しむだけでなく、他の誰かにお裾分けしよう」と、野菜の苗をプランターに植え、不登校児童生徒のための教室へプレゼントしたり、親子WSの皆さんに収穫体験をしてもらったり、世代を超えた交流もできました。小さなステップではありますが、同じ地域に住む同士の接点として、地域の「支え合い」のきっかけのための他者への気づきとして、これからも参加者の皆さんと知恵を出し合ってよりよい空間をつくっていきたいと思います。

親子でワクワク、
みんなでニコニコつながつて
気持ちもリフレッシュ♪



親子de仲間づくりワークショップ

乳幼児と保護者が孤立することを防ぐことを目的に、コミュニケーション・ワークショップを通じて、想像力や感受性を育みながら、親子で仲間づくり。

日程	4月～7月、10月～12月
実施回数	12回
会場	ala レセプションホール ほか
参加者数	555人
講師	新井英夫チーム(体奏家、ダンスアーティスト) Ten seeds(劇・あそび・表現活動)

そしてワークショップが終わってからも自由に過ごせるよう会場を開放しているので、引き続き興味の湧いたもので遊んだり一緒に昼食をとったり、清々しい天候の日には外の水と緑の広場へ赴きピクニック気分でお喋りしたりと、ワークショップに参加することを起点に、保護者の皆さんが気持ちをリフレッシュしたり情報交換したりできる時間となっています。全日程終了後の参加者アンケートでも、「育児のプレッシャーやストレスを軽減できましたか?」の質問に、毎回100%に近いさんが「とどくできた」「少しだけできた」と回答しています。

就学前教育のための 非認知能力ワークショップ 「わくどきぐんぐん」

子ども達が表現遊びを通して、他者との協働、感情のコントロール、目標の達成などの「非認知能力」を育むワークショップを実施。



日 程	7/8、11/4、1/13	実施回数	3回
会 場	ala 美術ロフト ほか	参加者数	延べ74人
講 師	アフタフ・バーバン(さとうりつこ、清水洋幸)		
アシスタント	山田久子(多文化演劇ユニット Michi)		
コーディネート及びアシスタント	絹川友梨(俳優、ワークショップ・ファシリテーター)		
協 力	Hands of God Kindergarten 可児市文化スポーツ課、可児市教育研究所		

ワクワク、ドキドキ、
ココロの扉がひらく



2000年、ノーベル経済学賞を受賞したジェームス・ヘックマン教授が幼児教育に関する研究の中で、幼児期に親子関係や周辺環境によって自然と身についていくべき「非認知能力」が、生まれた環境により損なわれると、結果としてその子どもの社会性や情緒性を奪い、自身の将来だけではなく、社会全体にとって様々な悪影響を及ぼす可能性があると示唆しました。こうした観点から、様々な理由で経済的に余裕のない世帯の子ども達(3~5才)を対象に本ワークショップを2021年から実施しています。

2022年度は、可児市内の認可外保育園「ハズズオブガッド」に通うフィリピンやブラジルから来た外国籍の子ども達を対象にワークショップを実施しました。内容は、「すいか」「おふろ」「ゆき」といった

テーマで、日本文化や季節感を楽しむものでした。テーマにあった絵本を読んでいると、その絵本に登場するものたちが、いつの間にか子ども達の前に現れ、物語の世界に誘われていきます。子ども達の中にあるワクワクが溢れだし、夢中になって創造の世界で遊ぶことができました。決められたものではなく、自分たちで考えて、仲間と一緒に遊ぶ時間。小さな子ども達にこうした時間をより多く届けられたらと思います。

この子達は来年度から市内の小学校に通いだします。今後もアーラの事業に参加したり、放課後の遊びにきたりと、子ども達にとって「劇場」が、「家庭」や「学校」のほかにも気軽にアクセスできるサードプレイス(もう一つの我が家のような場所)でありたいと願っています。

ピアノを通して
自己肯定感を育む



みんなのピアノ プロジェクト

「ピアノを弾きたい」という気持ちをもちながら、家庭環境等の理由でそれを叶えることができない子ども達に、その機会を地域の力でつくるプロジェクト。

日 程 通年 月・木・金の指定日
発表会: 3/19(計2回)

実施回数 513回

会 場 ala 演劇練習室・美術ロフト

集客数 発表会49人 参加者数 延べ562人

講 師 地域のピアノ講師・音大生等10人

つくることができました。2022年度は初めて発表会を行い、緊張しながらも子ども達は、これまでの練習の成果を出し切り一音一音丁寧に弾いてくれました。ちゃんとできるかな…と先生たちは不安もありましたが、日が近づくにつれて集中して練習するようになり、想像以上の演奏を披露してくれました。関係者向けの小さな発表会でしたが、喜んでくれている家族や先生達から、子ども達は人前で表現することに自信を持ち、大きく成長したように感じます。参加者アンケートで「このプロジェクトがなければ、ピアノを習うことも、弾くことも諦めていましたか」という質問に対し「はい」と回答した子どもは100%でした。地域の方々の力を借りて、子ども達が夢や希望を叶していく姿に、ピアノも喜んでくれているでしょう。最近は、市民の方から使わなくなった電子ピアノを寄付をしたいという声をいただけるようになりました。この共感の輪が大きく広がり、そして継続できるようにこのプロジェクトを育んでいければと思います。



私のあしながおじさん プロジェクト

地元企業・団体・個人の寄付金で中学生・高校生へアーラ公演チケットを贈るプロジェクト。2015年度からは経済的支援を受けている家庭を対象としたFor Family制度も開始。2020年度からは子ども達がピアノに触れる機会を応援する「みんなのピアノプロジェクト」へも活用の幅を広げています。

日 程	通年(計13公演対象)
会 場	ala 主劇場・小劇場
鑑賞者数	延べ128人(うちFor family52人)
協 賛	14企業・団体・個人から 計610,000円(一覧はP63掲載)
協 力	可児市福祉支援課 可児市教育委員会



年に一度、あしながおじさんから直接チケットが手渡される「チケット贈呈式」(2019年度)

地元企業・団体・個人が 子ども達の舞台芸術 鑑賞機会を応援！

未来を担う中学生・高校生のしなやかな心に、音楽や演劇など舞台芸術の「感動」を有志の皆さんのお手紙を有志の皆さんのお手紙により届ける「私のあしながおじさんプロジェクト」は、2007年度のトライアルを経て、2011年度より継続実施しています。これまでに1,700人を超える皆さんのが本プロジェクトにより公演を鑑賞しています。

2015年度からは可児市協力のもと、ひとり親などで児童扶養手当や就学援助を受けている家庭を対象としたFor Family制度も

開始しました。For Family制度では、家族で鑑賞することで思い出を共有しそこから会話が生まれてくることを願い、小学生以上の子ども達と保護者の方へもチケットをお贈りしています。For Family制度を開始した2015年、「森山威男ジャズナイト」を家族で鑑賞したお母様からお手紙をいただきました。

アーラでは色々な公演が行われている事は知っていましたが、母子家庭であり、小さい子ども達を連れて来ることは困難でした。今回の

プロジェクトを知ったきっかけは、市役所の相談員さんからの紹介によるものでした。現在の私は、ある疾病により休職中の身にあり、またその中で2人の子どもの事で悩み、行き詰って心に余裕がない状態です。そんな中で、「あしながおじさんプロジェクト」を知り、以前から興味があったジャズコンサートに応募させて頂きました。初めて子ども達と一緒にコンサートというものに参加することができました。7才と9才の子ども達の反応がとても楽しみでした。その一言目が「すごい！！」でした。2人の

瞳が輝き、一つひとつの楽器に興味を持ってくれました。「僕は2番目の曲が良かった」「ドラムを叩く人はすごいね！！」子ども達から色々な意見が聞け、興味の幅が広がったのではないかと思います。本当に貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。皆さんには感謝の一言につきます。また生かされている事にも感謝を感じる1日でした。



プロジェクトで公演を鑑賞した子ども達や保護者の方からのお手紙は、寄付をしてくださった、あしながおじさんに届けられます。同じ地域に住む子ども達の心が揺さぶられる機会を応援するために、そして生きづらさを感じている方々の心が少しでも元気になりまた前を向いて歩いていけるように、この寄付金には、「一緒に頑張ろう！」という温かいエールも込められているのだと実感するお手紙でした。

2021年のクリスマス・イブには、コカ・コーラ社より「あしなが自販機」がアーラ駐車場に設置されました。購入金額の20%が子ども達のチケット代に充てられます。普段の何気ない購入行為でも子ども達を応援することができる。一人ひとりの思いやりが積み重なって支え合える。プロジェクトがそんな地域の関係づくりの一翼を担うことができるべきと思っています。



「つながりを処方する」



まち元気プラットフォーム・その他

劇場に関わる人のための アーツマーケティング・ゼミ 「あとま塾2022」

劇場や地域の課題に向き合う関係者
と意見交換し、社会機関としての劇場
運営について学び合います。

日 程	6/16.17、9/15.16、12/22.23
実施回数	3回
会 場	ala レセプションホール
参加者数	延べ136人(リモート含む)
講 師	衛 紀生(alaシニアアドバイザー) 田代洋久(北九州市立大学法学部政策科学科教授) 堀田聰子(慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科教授) 藤岡聰子(「ほっちはのロッヂ」共同代表) 湯浅 誠(むすびえ理事長) 落合千華((一社)CoAr代表理事)



公共劇場は、鑑賞事業の実施だけではなく、地域社会のための社会的な役割や機能が求められています。2018年から『あとま塾』を開催し、アーラの鑑賞者開発の取り組みや、地域貢献及び社会包摂に関する考え方と具体例を題材にしながら、1泊2日の合宿形式で年3回多くの方と意見交換し、これからの劇場の姿を模索する場を設けてきました。

今年のテーマは『社会的共通資本としての劇場文化』とし、「文化政策」「社会包摂」「マーケティング」の観点を各回の個別テーマに掲げ、アフターコロナを見据えた今後の我が国のアーツカウンシルや地方創生の動向を把握するStep1、文化芸術プログラムの果たすべき新しい役割とその具体的な戦略ツールとしての可能性を秘めた社会的処方箋活動のあり方について

考えるStep2、来年度に迫った「子ども家庭庁」の発足へ向け、地域社会における社会活動人材としてのアーティストや市民の育成を「子ども食堂」から学ぶStep3を、各回の第一線で活躍する実践家や学術研究者を招いて、文化芸術の領域に留まらない広いパースペクティブでの学びの機会を提供すると共に、アーラの実践についても、毎回アーラ職員が事例報告を行いました。コロナ禍によって、人々のつながりが弱くなり孤立が生まれる社会状況のなか、市民活動もやせ細っていく状況、全てのソーシャルセクターが「つながり」という最重要キーワードを共有するべき状況が生まれている中、アーラとしても来年度から文化芸術を活かした《プラットフォーム》の構築を進めて行きたいと思っています。

2014年度から開催されてきた可児市での「世界劇場会議国際フォーラム」は今回で最後となります。これまでテーマは一貫として“劇場の社会機関”としての役割。社会包摂活動の実践を通して、公共劇場が社会にとって何ができるか、社会は劇場に何を求めているかを議論してきました。

2022年度は、アーラの小劇場にて2日間、延べ165人の劇場経営に関心のある様々な立場の関係者にお集まりいただき、コロナ禍以降の厳しい世界情勢のなか、専門性の高い経営課題を話し合い、国際フォーラムに相応しく、熱のこもったセッションが展開されました。

テーマは「文化芸術による社会的処方箋活動の実践と評価」について。1日目は、英国オーケストラの具体的実践、国内美術シーンの研究的取り組みに関わる内容でした。2日目は、社会的処方箋の劇場経営への応用や日本の医療現場における実践的取り組みを知り、その社会的価値の評価の重要性を考える機会となりました。

社会的処方箋としての文化芸術活動に評価が必要な理由は、社会的価値を可視化し、より多様な場にその価値を届けること。もう一つは“つながり”としての機能を解き明かすこと。可視化することで資金

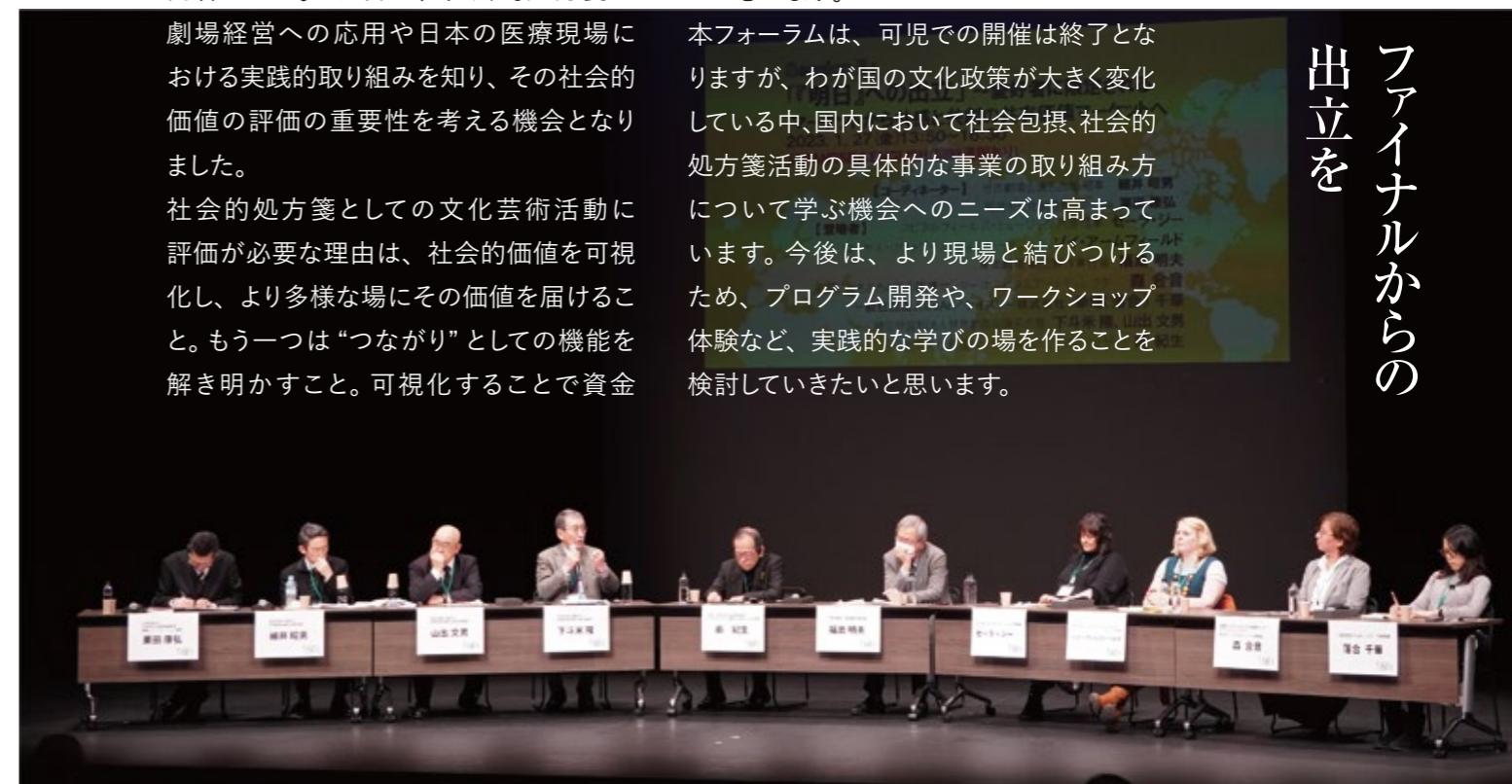
世界劇場会議国際フォーラム Final in 可児

国内外から先進的な取り組みをしている劇場・文化芸術関係者を招聘し、これからの時代の文化芸術、公共劇場の在り方について議論します。

日 程	1/26.27	会 場	ala 小劇場	集 客 数	165人
出 演	セーラ・ジー(スピタルフィールズ・ミュージック) ゾイ・アームフィールド(ロイヤル・リヴァーピール・フィルハーモニー) 福島明夫(青年劇場)、伊藤達矢(東京藝術大学社会連携センター) 森 合音(四国こどもとおとなの医療センター)、落合千華((一社)CoAr) NPOアーツプロジェクト)、落合千華((一社)CoAr) 衛 紀生(alaシニアアドバイザー)、栗田康弘(ala)				

提供側とのコミュニケーションに活かし、また活動の過程で起きる新しい価値・関係性を表出させることです。アーラとしても次年度以降、力を入れて取り組んでいきたいと思います。

本フォーラムは、可児での開催は終了となります、わが国の文化政策が大きく変化している中、国内において社会包摂、社会的処方箋活動の具体的な事業の取り組み方について学ぶ機会へのニーズは高まっています。今後は、より現場と結びつけるため、プログラム開発や、ワークショップ体験など、実践的な学びの場を作ることを検討していきたいと思います。



ファイナルからの
出立を



アーラまち元気部

学校の枠をこえてアーラに集まった中高生達が、地域のさまざまな人達と交流しながら、まちを元気にしていく部活動。



日程 6月～2月 実施回数 66回
活動報告会 2/26 会場 ala 映像シアター
集客数 45人 参加者数 延べ316人
協力 可児市、可児市教育委員会
可児市教育研究所、可児写真館
(福)可児市社会福祉協議会
文学座、FMラインウェーブ(株)
令和さくら高等学院
NPO法人alaクルーズ、新井英夫
板坂記代子、ごちゃまぜアートの会
NPO法人可児市国際交流協会 ほか



ゆうら

中学2年生

活動の中で一番印象に残っているのは「劇場たいけんツアーア」のスタッフをしたことです。この活動をする前は身近にあるアーラのことをあまり知ること知る機会がなかったのですが、小学生の子ども達に案内する中で、今まで知らなかったアーラのことや魅力について知ることができました。まち元気部の活動では、多くの人と関わることができます。この活動に参加しなかったら出会うことのなかった他の学校の子達とも仲良くすることができました。そして、他では体験できない、知ることができないことを経験することができました。私にとってまち元気部は大切な居場所になりました。



めぐみ

中学1年生



はづき

中学1年生

まち元気部では、FM ららでラジオ番組に出演したり、イルミネーションの製作を行いました。今まで体験したことのないことに挑戦することができました。また普段、学校とか習い事以外であまり人と関わることがなかったんですけど、まち元気部があることで他校の新しい友達ができたり、アーラに関係しているたくさんの人と出会うことができました。今までアーラは少し硬いイメージなどもあったんですけど、まち元気部の活動を通して、劇場に行く機会が増えて、身近なものになりました。



こはな

中学1年生



近年の教育現場は、学校の働き方改革を推進する目的で、学校部活動の外部化を推進しており、地域の中で持続的な文化芸術活動が子ども達に行われることが求められています。この流れを受けて、これまでのプログラムを活かして子ども達、そして地域の繋がり回復を軸とした多世代交流の取り組みとして、「アーラまち元気部」という活動が立ち上がりました。

私は学校の部活に入っていないくて、ボランティア活動などに興味があって参加しようと思いました。まち元気部に参加できて本当に良かったと思っています。このメンバーと出会えたり、将来のために活かせる体験ができたり、普段出会えない人と出会えたり、この1年間、本当に楽しかったです。来年のまち元気部にも絶対に参加しようと思っています。いろんなボランティア活動に参加したり、いろんな人の手助けになる活動ができればと思っています。





寄付金合計
314,536円

お客様からの募金
 =167,215円
 公演の収益
 =147,321円

被災者へ向けた
 アーラが広げる、
 共感の輪

東日本大震災復興支援祈りのコンサートは、東日本大震災によって被災した地域や被災者への支援を目的としています。2011年の震災から12年が過ぎましたが、被災された方々のカウンセリング等の相談件数は今なお高止まりの状況にあり、高齢化やコミュニティ弱体化によるストレスの増加等、様々な要因が絡み合い問題は複雑化しています。時間がかかる心の復興のために、祈りのコンサートはその一助として、震災があった年から毎年アーラで開催されています。

連携している団体・施設・企業・個人

可児市、可児市教育委員会、市内小中学校、NPO法人alaクルーズ、可児市教育研究所・スマイリングルーム、NPO法人可児市国際交流協会、社会福祉法人可児市社会福祉協議会、可児市土田自治連合会、Hands of God Kindergarten、令和さくら高等学院、ごちやまぜアートの会、FMラインウェーブ株式会社、可児写真館、株式会社ケーブルテレビ可児、株式会社ヤイリギター、公益財団法人岐阜県教育文化財団、TASCぎふ、アーラ映画祭実行委員会、可児歌舞伎、NPO法人世界劇場会議名古屋、まち元気センター(ala Collection市民センター)、みんなのディスコ市民センター、「君といた夏」市民センター、多文化共生プロジェクト市民センター)、アーラ紙芝居一座、地域のピアノ講師・音大生、星野京子(順不同・敬称略)

私のあしながおじさんプロジェクト/
 協賛企業・個人

可児ライオンズクラブ、株式会社新和建設美濃加茂支店、カヤバ株式会社、信和工業株式会社、東濃建物管理株式会社、丸茂電機株式会社、丸理印刷株式会社、ヤマハサウンドシステム株式会社、有限会社可児板金工業所、有限会社亀谷電気商会、匿名を希望する個人4件(順不同・敬称略)

東日本大震災復興支援 祈りのコンサート/
 協賛企業・団体

株式会社カラビナ、株式会社松栄堂楽器可児店、株式会社トイ・ファーム、株式会社ワズ・プランニング、岐阜県舞台設備管理事業協同組合、じやぱんSANDWICH、ハーモニーワークス、ホテルルートイン可児、丸理印刷株式会社(順不同・敬称略)

イギリスの劇場に憧れて

澤村 潤 可児市文化創造センター ala 演劇プロデューサー

West Yorkshire Playhouse

「しゃかいほうせつ」って???

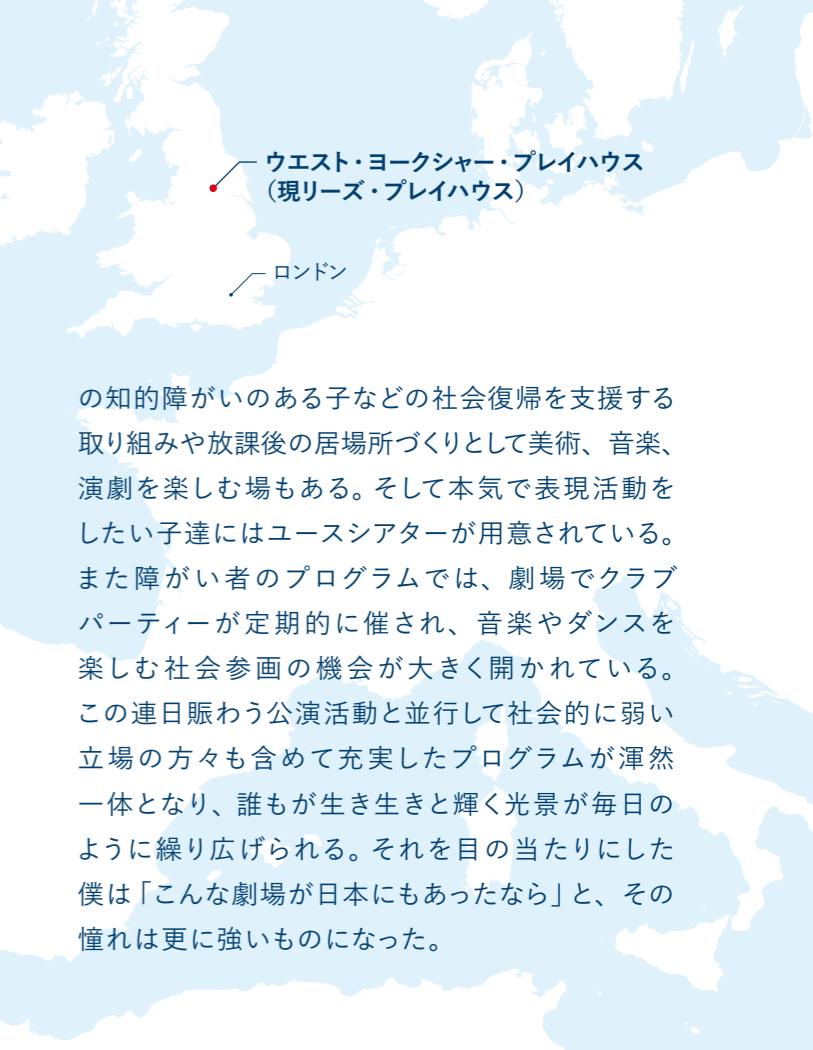
2011年11月。僕は英国リーズに降り立った。フライト15時間の道のり。本来なら疲れ切っているはずだが、気分は高揚していた。なぜなら憧れてきたウエスト・ヨークシャー・プレイハウス(現リーズ・プレイハウス)での研修がこれからはじまるからだ。この憧れはいつから始まったのだろう。2002年11月に僕は東京グローブ座制作部を退職し、アーラに入職した。東京での演劇制作より地域の公共劇場に魅力を感じていた。当時の僕はアーラで、演劇公演や市民との演劇製作などを担当し、「演劇を地域に広めていきたい」と一生懸命だった。しかし、数年もすると演劇公演も市民との演劇創作もリピーターの方々ばかりで広がっていないことに気付く。公共劇場は全ての市民に目を向けなければいけないのだが、結果的に一部の芸術愛好家の方々に偏ってしまう。それは全国どこでも同じ状況で、その解決策を見出せないでいた。そんな中、2007年に衛紀生さんがアーラの新館長に就任した。衛館長は「これからは社会包摂だ」といった。「しゃかいほうせつ?」最初は言葉の意味もわからなかった。しかし衛館長のそばで仕事をしていく中で、その意味が徐々に分かってきた。社会包摂とは「社会的弱者の方も、誰もが排除されず、あらゆる人々を社会の中で受け入れていく」という考え方で、衛館長はそれを劇場で文化芸術を用いて実践しようとしていた。それが実現出来たら

凄いと思った。でも、具体的にどのような事業をしたら良いのかわからない。すると衛館長は「我々が理想とする劇場は英国のウエスト・ヨークシャー・プレイハウスだ」という。さらに衛館長からそこでの様々な取り組みを聞くたびに、「行ってみたい」という思いが次第に強くなっていた。そして2011年11月、文化庁の在外研修制度を活用して80日間の研修に行く機会を得た。

いざ! 憧れの英国劇場へ!

研修初日、大きな期待を胸に劇場事務所に赴いた。まず驚いたのは、事務所が汚い。積み上げられた書類や無造作に置かれたワークショップの道具類など…整理する暇もない程、スタッフは忙しいのか。さらに驚いたのは、デスク下で蠢く黒いなぞの物体…犬! 「家に誰もいないから事務所に連れてきたの」とスタッフのニッキーさんが笑顔で言う…日本では考えられない。でも、誰に迷惑をかけることもなく大人しく1日デスク下で座っている。いやむしろ、ワンちゃんの存在が癒しの効果を与えてくれる。この雑多で自由な事務所の空気がとても心地よい。そして何よりもスタッフたちが、とにかくフレンドリーで明るい。劇場に来る市民に常に笑顔で優しい言葉を投げかける。まるで全員が友達みたいに。だから、なおさら劇場の居心地の良さを感じる。英国の劇場では、僕が研修を行った

クリスマスシーズンが1年で最も盛況な時期で、クリスマス公演により連日、親子連れで賑わっていた。楽しそうな家族の姿はこちらの心まで温めてくれる。この盛況な公演がある一方で、子どもや高齢者、障がい者など様々な対象に向けたプログラムが毎日のように行われている。これこそがこの劇場のもうひとつの魅力だ。例えば、高齢者プログラムでは、通常なら閑散としている平日の午前から午後にかけて高齢者のために解放し、歌、ダンス、演劇、編み物など、15種類以上の講座が一斉に行われ、300人以上の高齢者が毎回参加する。そして3か月に1回発表会が行われる。その模様は高齢者の大文化祭のようだった。青少年プログラムでは、軽犯罪を犯した子や軽度



の知的障がいのある子などの社会復帰を支援する取り組みや放課後の居場所づくりとして美術、音楽、演劇を楽しむ場もある。そして本気で表現活動をしたい子達にはユースシアターが用意されている。また障がい者のプログラムでは、劇場でクラブパーティーが定期的に催され、音楽やダンスを楽しむ社会参画の機会が大きく開かれている。この連日賑わう公演活動と並行して社会的に弱い立場の方々も含めて充実したプログラムが渾然一体となり、誰もが生き生きと輝く光景が毎日のように繰り広げられる。それを目の当たりにした僕は「こんな劇場が日本にもあったなら」と、その憧れは更に強いものになった。



事務所に居た犬と



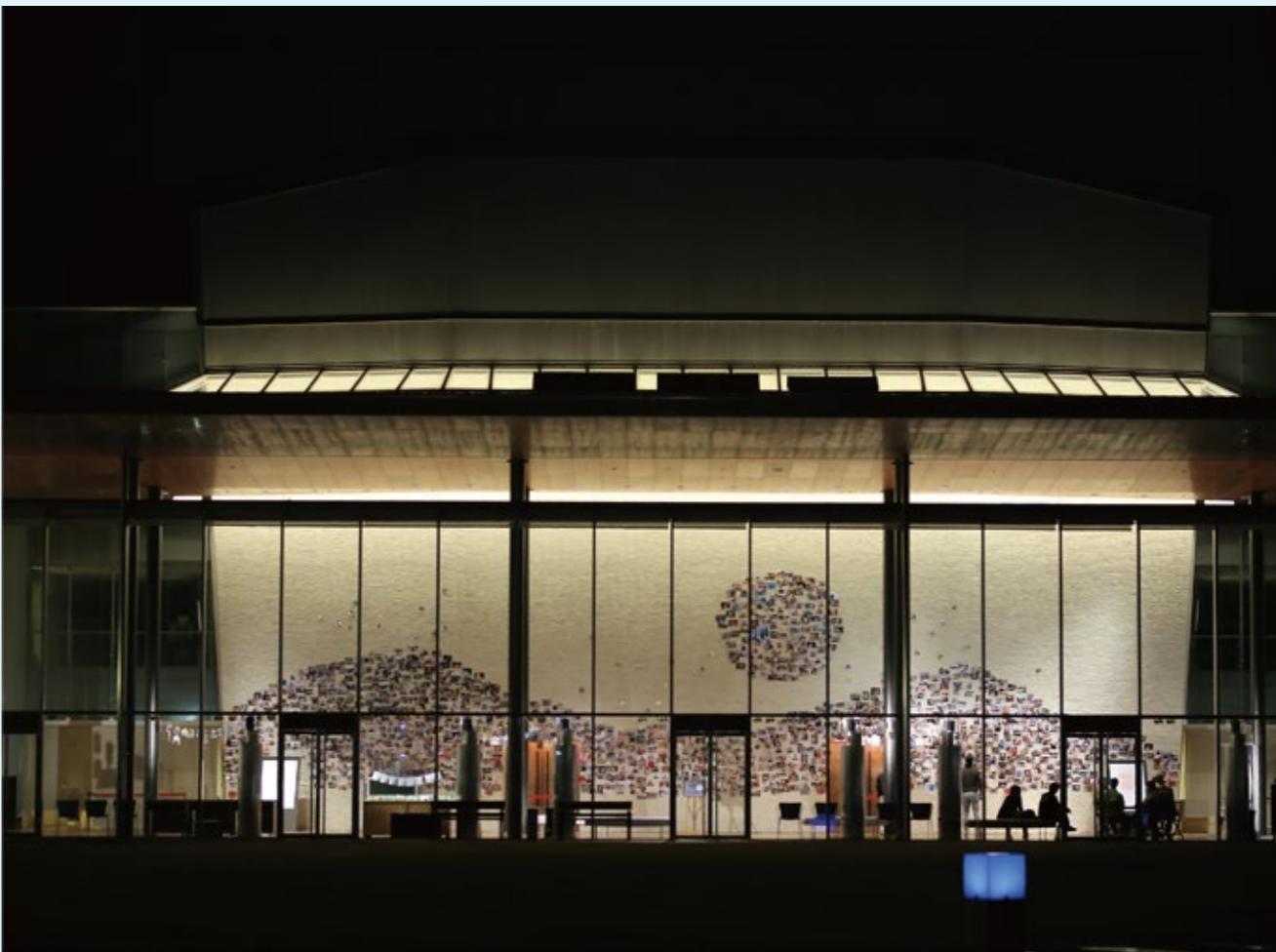
観客で賑わうロビーの様子

Kani Public Arts Center ala

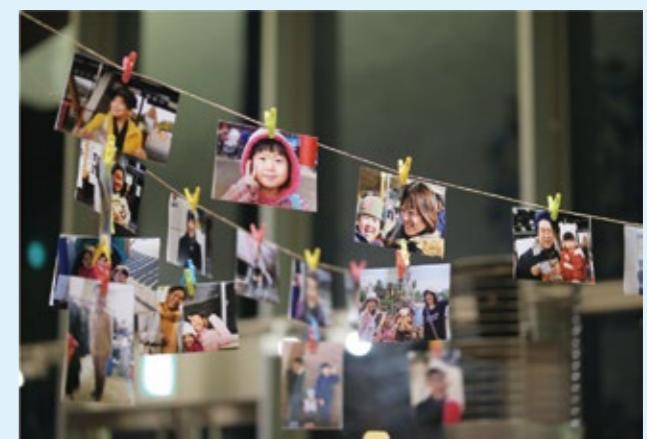
alaまち元気プロジェクト「えがお」で彩る可児の街並み

研修を終えた僕は、英国で見てきたプログラムをアーラで早速実践してみたいと思った。もちろん英国と日本では文化や習慣などが違うため、それをそのままやっても成功はないだろう…と、思ひながらも高齢者プログラムをやってみた。平日の午前中、アーラ諸室を解放して、ダンス・落語・合唱など5つの講座を実施した。すると約130人の参加者が集まり、大盛況だった。さらに講座系はこれまで8割がリピーターであったが、このプログラムでは逆に8割が新規の参加者であった。そして参加した皆さんのがんばり姿がとにかく眩しかった。また、障がい者プログラムとして「みんなのディスコ」と銘打ったクラブパーティーをアーラでもやってみた。欧米では盛んなクラブ文化、日本では馴染みがないので、上手くいのだろうかと不安だったが、障がいの有無、世代、国籍など、全ての垣根を超えて音楽でひとつになる奇跡的な盛り上がりを見せた。文化や習慣の違いは関係なく、楽しいプロジェクトには自然と人が集まる。だからこそ、固定概念に縛られない人をワクワクさせるプロジェクトを生み出す能力と、それに共感してくれる仲間たち、さらに実行に移す情熱が僕らには必要なんだと認識した。「alaまち元気プロジェクト」はアーラ職員だけでは決して成し得ない。プロジェクトに賛同し、支えてくれる市民の存在が無ければ成立しないからだ。その市民

サポーターの中で忘れられない人がいる。定年後からアーラのサポーターとして関わっていただいた石黒修さんだ。石黒さんがアーラに来ると若い職員らが彼の周りに自然と集まる。僕らの親父的存在だ。気さくで世話好きで、頼れる石黒さん。数々のプロジェクトで僕らを支えてくれた。中でも印象に残っているのは、市民の笑顔の写真を1,000枚撮影して、主劇場ホワイエに飾るという「スマイリング・プロジェクトII」のことだ。「1,000人もの笑顔の写真を撮れるかな」と不安げな僕に「やれるだけやってみようよ!」と背中を押してくれた。そして真冬の撮影で「寒いから早めに切り上げましょうか」というと「何言ってるの、まだまだこれからたくさん人がくるよ、頑張ろうよ!」と励ましてくれた。そして気が付けば笑顔の写真は1,400枚に達していた。しかし、その企画の最中に石黒さんは突然倒れ、帰らぬ人となってしまった。この突然の訃報に涙で仕事にならない仲間達。しかしこのプロジェクトの成功を誰よりも望んでいたのは石黒さんだ。だからこそ何としても成功させたい。主劇場ホワイエの壁面をキャンバスとして「鳩吹山の上に登る満月が、「えがお」に溢れた可児の街並みを優しく照らしている」そんな景色を1,400枚の笑顔写真で描き上げた。その満月の中央には誰からともなく石黒さんの笑顔の写真が掲げられていた。悲しみや挫折や苦労を乗り越え、「えがお」で満たされる可児の街並みを…これからもその一端を市民と共に生み出していきたい。石黒さんと共に歩んできたように。



市民サポーターとともに完成させた写真展「スマイリング・プロジェクトII」(2016年度)





多文化共生プロジェクト2010 公演「夏の夜の夢」(2010年度)



親子de仲間づくり
ワークショップ(2014年度)



新日本フィル 音楽アウトリーチ(2018年度)



日英共同制作公演
「野兎たち／Missing People」
サポーター活動(2019年度)

人々の思い出が詰まった「人間の家」へ…
その実現のために15年前に立ち上げたプロジェクトが
このレポートで記した「alaまち元気プロジェクト」です。

「公共劇場」とはなにか。
「文化芸術」で出来ることはなにか。
「まちを元気にする」とはなにか。

その答えを模索し、地域と向き合い、悩みながら
ひたすら走り続けてきた15年間でした。
そしてその答えは未だ、私達にもわかつていません。

しかし、わからないながらも「気付いた」ことがあります。

それは「まちを元気に!」という私達の思いに賛同し、
一緒にになって取り組んでくれる多くの方々と出会えたことです。
そしてその取り組みは、このレポートで記してきたように
多くの「えがお」を生み出して来ました。

今の社会は格差や分断が広がり、
人々が孤立しやすい状況にあります。

だからこそ、「誰かのために」という共感の輪を
そこに賛同してくれる多くのみなさんと共に
社会に広げていくことが「公共劇場」の使命だと感じています。

まだ見ぬ誰かの「えがお」を求めて…

文化芸術によるこの豊かなつながりの「ものがたり」を
これからも綴っていきます。

アーラ職員一同



**KANI PUBLIC ARTS CENTER ala
MACHI GENKI PROJECT
2008-2021/2022**

alaまち元気プロジェクトレポート
2008-2021/2022

発行日 令和5年9月1日
発行 公益財団法人可児市文化芸術振興財団
〒509-0203 岐阜県可児市下恵土3433-139

プロデューサー 栗田康弘
デザイン ソライロデザイン
印刷・製本 株式会社ワンズ・プランニング
